

---

# 機動戦士ガンダム00 DESTINY外伝 『義翼の鳥』

ミーティ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

機動戦士ガンダム00 DESTINY外伝 『義翼の鳥』

### 【NZコード】

N4515X

### 【作者名】

ミーティ

### 【あらすじ】

これは、『灰色の運命』（00本編のセカンドステージ）の5年前、戦争根絶を掲げ、武力介入を行うソレスター・ビーリング（CB）に立ち向かったある一人のフラッグファイターの物語である。

## プロローグ

海上

ユニオン軍艦

今、一人のパイロットースース姿のユニオン軍兵士が飛行形態のフラッグの前に立つた。

「フツ、『あの人』に一歩近付いたか…」

その兵士はフラッグをいとおしそうに触った。

その兵士の名は『飛鳥龍義』。

年齢は18にして、少尉の階級を持つ、類いまれなる才能を持つ『フラッグファイター』だ。

龍義「大切な者を守れる為の力、俺はそれを以てこの空を飛ぶ。このフラッグと共に。」

龍義は『義手』である右手を空に向け、その手を広げ、そして、握り締めた。

因みに、『あの人』とは、無論グラハム・エーカーのことだ。グラハムとはかつて幾度か模擬戦を行い、龍義は惜しい所で負けているのだ。

龍義「『ミコ』、俺は親父と叔父が共に飛んだこの空を飛ぶ。」

ミコとは、龍義の従妹で、名字は玲で、年は10。

龍義の父親と心優の父親は兄弟であり、戦友として空を飛んでいた。因みに叔父の名字が父親とは違う理由は、経済的な理由から、叔父が養子に出されたことがその理由である。

因みに、ミコの母親はフランス人である。

だが、6年前に故郷の日本で自動車事故に合い、龍義の両親とミコの両親は共に死亡し、龍義も右腕を肩から先を失い、2年前にユニアオン軍に入るまで、ずっと左腕一本で心優と共に生きてきた。

そのため、利き手は実質的には左利きになっている。

それはパーソナルマークにも現れており、右の翼が機械的なデザインになっている。

龍義「…さて、行くとするか。」

龍義がそう呟いた直後、スクランブルのサイレンが鳴った。

龍義には人より『勘』が鋭く、その鋭い勘と類い希なる才能、そして涙ぐましい努力によってフラッグファイターの称号を勝ち取ったのだ。

龍義「相手は？」

龍義はフラッグのコクピットに乗り、通信を行つた。

『ヘリオング3機です。』

龍義「ヘリオング3機？　AEUのばら焼きか…」

『発進どうぞ！』

龍義「飛鳥龍義、フラッグ出るー！」

龍義のフラッグは高らかに空に舞い上がり、先行していたリアルド

部隊を追い抜いた。

龍義「あーあー、そこの所属不明機、ここはコニオンの領域だ。今すぐ引き返せ。」

龍義は3機のヘリオンにコニオン領域からの撤退を要求した。だが、3機のヘリオンからの返答はなく、その代わりに

龍義「再度通告する。今すぐ引きかえ　　ツ！？」

龍義の『勘』が危険を感じ、操縦悍を名一杯動かした。フラッグがいた所にヘリオンの攻撃が通過した。

龍義「…それが返答か。此方、ヘリオンの攻撃を受けた。発砲許可を。」

3機のヘリオンは散開し、まるで肉食獣の様にフラッグに詰め寄つた。

龍義「取り囮まれた？！　だが、その程度ではこのフラッグを落とせはしない！」

龍義は操縦桿を押し込み、フラッグのバーニアが火を噴き、ヘリオンの檻から脱出した。

ピピッ！

『発砲許可が降りました。』

龍義「その言葉を待っていた！」

龍義はそう言ひ、フラッグは反転してヘリオンに迫った。

ガシャッ！

「！？」

ヘリオンのパイロットは驚愕の光景を田の当たりにした。田の前のフラッグが変形したのだ。

龍義「ぐくつ…！ これが、グラハム・マーユーバー！」

変形したフラッグは変形した反動を使い、1機のヘリオンの上を取り、バーニアを撃ち抜いた。

龍義「次！」

フラッグは更にもう1機のヘリオンのウイングを全て撃ち抜いた。

龍義「ぬるいな。」

「くつ…クソオ…！」

残つたもう1機のヘリオンはフラッグに突撃した。

龍義「その程度！」

フラッグは空いてる右手にソニックブレイドを持ち、刃をプラズマソードにし、ヘリオンの右半身を両断した。

「うはつ WWWWW すげえ WWWWW

「あいつ18だよな？！ な？！」

「ハハツ！ こりゃ楽しみだな！」

「おい！ わたと回収しろ！ 生命反応あるぞ！」

龍義「何やつてんですか？」

フラッグは右半身を両断したヘリオンを海面を引き摺るよつてして運んでいた。

「うえ WWWWW エゲツねえ WWWWW」

「容赦ねえなおい！」

「うはつ WWWWW あれやられてみてえ WWWWW」

「ドミかよお前？！」

「嘘だし WWWWW」

「嘘かよ…」

「だからさつさと運ぶぞ貴様ら！…！」

「コイツつぜえ WWWWW」

「撃ち殺すぞ貴様！…！」

「階級俺より下のクセに WWWWW」

「ぐつ…！」

龍義「…ハア…」

龍義は彼らの言い合いに溜め息を吐いた。

その後、3機のヘリオンは、龍義の指摘通り、AEUが『ばら時いていた』機体であった為、AEUは非難を受けたのはいつまでもない。

龍義は自室でグラハムと通信をしていた。

グラハム「話は聞いていたが、かなり腕を上げたようだな。」

龍義「いえいえ、中尉には敵いませんよ。」

グラハム「フツ、その腕ならMSWADに入れるぞ?」

龍義「…考えとります。」

グラハム「そうか、次の機会があれば手合わせを願おう。」

龍義「いえ、それは普通逆…はい。」

グラハム「そろそろ私はこれで失礼する!」

グラハムは通信を切った。

龍義「…ハア…中尉は疲れる…」

龍義は本日二度目の溜め息を吐き、外に出た。

龍義「…」

龍義は風を感じながら首にあるペンダントを開いた。

そこには、赤毛の少女の写真があつた。

その少女が龍義の従妹のミコなのだ。

龍義「ミコ…」

龍義は日本の施設にいるミコが見てるだろう用を見上げた。これは世界が『ガンダム』を知る3ヶ月前の話である。

## プロローグ（後書き）

遂に始めちまつた…始めちまつたぞ…！  
これから、龍義がどうじBやグラハム達と絡むのか、楽しみにして  
ください

## 飛鳥龍義の紹介

飛鳥 あすか  
龍義 りゅうぎ

性別、男

誕生日、8月26日

年齢、18歳（但し、プロローグはCBが武力介入を始めるその3ヶ月前の為、『世界がガンダムを知る時』には19歳になっている。）

髪の色、黒

髪型、少し癖つ毛のあるショートヘア

瞳の色、薺色

身長、178？

出身地、日本

階級、少尉

ユニーク軍に所属するMSパイロットであり、グラハムに次ぐ実力を持つと言われているフラッグファイターである。

非常に勘が鋭く、自分の周囲に起る事や他人が考えている事等がある程度判るらしい。

独特的の感性や高い洞察力を持っているのも、その鋭い勘によるものである。

私服は和服に洋服の要素を組み合わせた服（本人曰く、『洋和服』）を着ている。

たいへんな努力家であり、その鋭い勘と合わせ、軍に入つて僅か1年でフラッグファイターの称号を手に入れた。

夢は父親と叔父と共に空を飛ぶ事であり、元々ユニオン軍には入る予定だつた。

だが、6年前の事故により、両親と叔父は死亡し、龍義自身も右腕を肩から先を失つた。

夢を失つた龍義だが、従妹のミコを守りたい為に前倒しでユニオン軍に入つたため、学校は所謂中卒だが、独自で高校の勉強をしていた。

因みに、成績は全科目で10位以上をキープしていた。

軍に入るまでは義手を拒み、左腕一本で何でもこなしてきたため、実質的な左利きになつている。

それはパーソナルマークにも現れており、パーソナルマークは右の翼が機械になつている鳥である。

義手はEカーボン製の骨と人工皮膚、機械の筋肉、生体パートである人工神経で構成している。

人工神経は人工筋肉を正確に動かす為にあり、龍義の神経と接続する為、義手の接続及び取り外し、更に人工神経の損傷等の際には痛みを感じる。

人工神経と人工筋肉の維持とメンテナンスにはナノマシンが欠かせないが、ナノマシンを貯めておくタンクは龍義の右肩の義手の接続部内部にある為、ナノマシンの補充には義手を取り外す必要があり、取り付けや取り外しの際には、人工神経の切断や接続による痛みが走る。

龍義はその痛みを感じる度に『事故』の事を思い出している。

義手取り外しと取り付けがパイロットスーツを着ていても円滑に出来るように、パイロットスーツは特注品である。

## 第1話 ソレスタルビーイング（前書き）

グラハムからAEUの新型MSのデモンストレーションの話を聞いた龍義は、日本から来た従妹のミコの為にフラッグでの模擬戦を行うが…

## 第1話 ソレスタルビーリング

プロローグから3ヶ月後

ユニオン基地

龍義「AEUの新型MSのデモンストレーション?」

19歳になった龍義はこの基地にやつて来たグラハムの言葉を言い返した。

グラハム「ああ、そうだ。」

龍義「ですが、MSWADのエースがそんな所に行っていいんですか?」

グラハム「フツ、無論良くはない。」

龍義「(やつぱりな。……だけど、興味の方が勝るな。)…それは何時ですか?」

グラハム「三日後だ。」

龍義「三日後ですか。それなら問題は…ん? 三日後って確かに、人革連の電力送信10周年パーティーがあつ!」

グラハム「フツ。」

龍義「AEUはなんでこのタイミングで…?」

グラハム「さあ、だが、急がなければならぬ理由はあるだろ?」

龍義「…」

そこで龍義は少し考え

龍義「分かりました。自分も行きます。」

グラハム「フツ、その言葉が聞きたかった。」

グラハムはそう言いながら龍義に紙切れを渡した。

龍義「これは？」

グラハム「集合する日時と場所が書いてある。無くすなよ？」

龍義「はい。」

「飛鳥少尉。」

1人の兵士が龍義に近付いた。

龍義「何だ？」

「面会です。」

龍義「ああ、分かった。」

グラハム「ん？ 面会とは？ 誰か来るのか？」

龍義「ええ、右腕です。」

グラハム「ミユ？ 少尉の妹さんか？」

龍義「従妹です。」

グラハム「そうか、それは失礼したな。」

龍義「いえ、そんな謝ることではありませんよ。」

グラハム「ん、そうか。」

龍義「では、自分はこれで。」

龍義はお辞儀をしてその場から立ち去った。

グラハム「…飛鳥龍義、それでいい。守りたい者を守る為に空を飛

べ。」

グラハムのその弦さは、誰の耳にも届くことなく消えて行った。

ミコ「龍兄！」

ミコは龍義を見付けて呼んだ。

龍義「ああ、ミコ。直接会つのは2ヶ月振りだな。」

龍義はミコの頭を撫でた。

ミコ「えへへ～」

龍義「ああ、この前、俺がフラッグに乗れたのは知ってるな？」

ミコ「うん。」

龍義「今日は上と話してお前の為にフラッグを見せよつと申つ。」

ミコ「え？ 本当？」

龍義「ああ、本当だ。着いてこい。」

龍義は歩き出しき、ミコはその後を追つよつと歩き出した。

龍義「……」

龍義は人混みの中で不敵な笑みを浮かべているグラハムと田代が合つた。

龍義「（…何か一悶着あるな…）」「

その龍義の考へは的中する事になる。

ミコ「おおーー！」

ミコは飛行形態で飛ぶフラッギを見て、歓声を上げた。  
因みに、龍義の提案は模擬戦という形で行われる為、リアルド2機と戦う事になった。

龍義「聞こえるか？」

龍義は2機のリアルドに通信を行つた。

『なんだしｗｗｗｗｗ』

龍義「俺の従妹が見に来ているのは知ってるな？」

『ああ、知ってるぜ？ 別に手加減ならしてやつても

龍義「『本気で』掛かつて來い。』

「えつ？」

「うはつｗｗｗｗ　マジッスかｗｗｗｗ」

龍義「言つた筈だ。実戦だと思って本気で掛かつて來い。』

『いや、なんか付け加えてないか？！』

「うはつｗｗｗｗ　別に良いッスよｗｗｗｗ」

龍義はそこで怒りで燃え上がらせる発言をした。

龍義「フツ、ビツセ『勝てつこない』がな。」「あつ？！」

龍義「おい、掛かつて来いよ。『本氣でな』。」「おいテメハ、幾ら階級が上だからって、若造の癖に調子乗るなよ！」

「！」

「燃え上が～れ WWWWW 燃え上が～れ WWWWW」

「お前が一番邪魔過ぎるわッ！」

「うはつ WWWWW 味方なのにその言われようとか WWWWW マジウザす WWWWW」

「潰してやる！…」

リアルドはフラッグに攻撃を仕掛けた。

因みに、この会話は全て他には聞こえていない。

「俺だつて、フラッグに乗りたいんだよ！… それをお前が…！」

「お前怒りつぽいもんな WWWWW 上官にも楯突くからフラッグに乗れねえんだよ WWWWW バーカ WWWWW」

「何だと！？ だつたら一人で奴を撃ち落としてやる！…」

「ガンバ WWWWW」

「墜ちろ！…」

龍義「あつと！」

フラッグはリアルドの攻撃を躲した。

「うはつ WWWWW 俺ハブられたし WWWWW しじうがねえ WWWWW こまま見学すつか WWWWW」

「当たれ！」

龍義「当たるか！」

フラッグはリアルドの攻撃を躲した。

「くつ！ だが！ それはフラッグの性能のお陰だ！」

龍義「だが、幾ら性能が良くても、それを扱うパイロットが無能だと、宝の持ち腐れとなる。」

「なら、フラッグの性能を生かせないまま墜ちる……。」

龍義「あなたも見た筈だ！ 僕の実力を！」

フラッグはリアルドの攻撃を躊躇しながらMS形態に変形した。

「なつ？！」

龍義「グラハム・マニコーバ！」

「ハツ？！ しつ…しまつ…？！」

MS形態に変形したフラッグは、リアルドの装甲をペイント弾で赤く染めた。

「や…やられた…？」

「流石だぜ WWWWW！」

龍義「次は…」

フラッグは再変形し、もう1機のリアルドに向かつた。

「うえ WWWWW こっち来たし WWWWW やべ WWWWW 勝てる気しねえ WWWWW」

それでも、リアルドはフラッグを迎撃しようとした。

「ペッピッ！」

龍義「！」

「うえ？！ WWWWW

リアルドはペイント弾で赤く染まつた。

「うえ WWWWW 何が起きたし WWWWW

龍義「…ハッ！ あれば！」

龍義はこちらに向かつて来る『フラッグ』を見付けた。

ミコ「フラッグがもう1機…？」

「いや…フラッグは飛鳥少尉の機体だけだ。」

ミコ「えつ？」

「…いや…まさか…？」

ミコ「？」

そして、その乱入したフラッグから、『あの男』の声が聞こえた。

グラハム『余興は終わりだぞ！ 飛鳥龍義！』

皆「！？」

龍義「やつぱりか…！」

グラハム「フツ、この前私と模擬戦をすると書いたー。」

龍義「あー…そうでしたね。」

グラハム「では、始めるぞ。」

龍義「（始末書…とか言つてももう無駄だなこれ…）…はい。」

こうして、龍義VS・グラハムの模擬戦が始まつた。

「やれやれ…グラハムも無茶をするね…」

ミコ「…えつと…？」

「ああ、僕はビリー・カタギリ。」

ミコ「玲ミコです。」

ビリー「ミコちゃん…でいいかな?」

ミコ「はー。」

ビリー「ミコちゃんはどうして此処に?」

ミコ「あ、従兄に会いに来ました。」

ビリー「ふーん、その従兄は何処にいるのかな?」

ミコ「えー…従兄は…」

ミコは上を見上げた。

そこには変形を繰り返しながら模擬戦を行う2機のフラッグがいた。

ビリー「えっ? もしかして…従兄って飛鳥少尉?」

ミコ「はい。」

ビリー「へえ…やうなのか…」

ビリーも空を見上げ、まるで舞い踊っているかのように空を飛ぶ2機のフラッグを見た。

「…あれも時代か…」

一人のユニアオン軍パイロットは2機のフラッグの戦い方を見ながらそう呟いた。

「うはつ wwwww 僕も後もつ少ししたらフラッグ乗れるし www  
www」

そしてグラハムとは違つべクトルで我が道を行く男が現れた。

ミコ「あ、『かねどき鐘時』さん!」

鐘時「うはつ wwwww 誰かと思つたらミコちゃんチイーツス w

~~~~~ 後カタギリさん~~~~~

ビリー「やあ、坂田少尉。君にもフラッグが配備されるのかい？」

鐘時「龍義がMSWADに行つたらな~~~~~

ビリー「…ん？ 飛鳥少尉とは面識があるのかい？」

鐘時「家が隣同士~~~~~

ビリー「ああ、そういうことか。」

鐘時「そんな事よりやつと見よつば~~~~~

ビリー「ああ、そうだね。」

鐘時達は空を見上げた。

龍義「くつ…！ 流石は中尉… どうやつても追い詰められぬ…」

グラハム「フツ、少尉もやる… 気を抜けばやられる…」

2機のフラッグは激しいデッジヒート繰り広げていた。

龍義「だが、このままこんな事をしても時間の無駄だ…なら…」

龍義のフラッグは飛行形態のまま急転回した。

グラハム「何？」

龍義「これなら…」

グラハム「はつ…」

グラハムが何かに気付いた瞬間、龍義のフラッグがMS形態に変形し、模擬戦用ナイフで斬りかかった。

グラハム「くつ！」

グラハムのフラッグはなんとか龍義のフラッグの攻撃を躱した。

龍義「チツ、これで掠りもしなかつたとは……」

グラハム「後少し気付くのが遅れてたなら確實にやられていた！やはり腕は上げているようだな！ならば！」

グラハムのフラッグもMS形態に変形し、リニアライフルで撃つた。

グラハム「此方からもいかせて貰うぞ！」

グラハムのフラッグはリニアライフルで撃ちながら龍義のフラッグに接近した。

龍義「だが！」

龍義のフラッグはグラハムのフラッグの攻撃を躱した。

グラハム「むつ！」

龍義「これなら……」

龍義のフラッグはグラハムのフラッグに急接近し、模擬戦用ナイフを突き出した。

グラハム「その程度の攻撃！」

グラハムのフラッグは龍義のフラッグの攻撃を躱した。

龍義「なら、これはどうだーー！」

龍義のフラッグは模擬戦用ナイフを投げた。

グラハム「ツー！（だが、直撃では…ハツ？！）」

グラハムが何かに気付いた瞬間、グラハムのフラッグのリーアライフルに模擬戦用ナイフが突き刺さった。

グラハム「しまつ…？！」

龍義「フツ…！」

グラハム「フツ、流石だな。早く私の部下になつて欲しいものだ！」

龍義「当てる！」

龍義のフラッグはリーアライフルでグラハムのフラッグに攻撃した。

カチカチッ

龍義「！？ 弾切れ？！…くつ…！ なら…！」

龍義のフラッグは模擬戦用ナイフを持ち、グラハムのフラッグに突撃した。

グラハム「そう来るのなら、私もそうしようー！」

グラハムのフラッグも模擬戦用ナイフを持ち、唾競り合いを行つた。

グラハム「やはり飛鳥少尉は私をたきらせてくれるー！」

龍義「それは…どうも…！」

龍義のフラッグはグラハムのフラッグを蹴飛ばした。

グラハム「クツ！」

龍義「止めだ！」

龍義のフラッグはグラハムのフラッグ目掛け、模擬戦用ナイフを突き出した。

グラハム「だが！」

グラハムのフラッグは機体を翻し、龍義のフラッグの攻撃を躱した。

龍義「！？」

グラハム「抱き締めたいな……！」

グラハムのフラッグは龍義のフラッグに抱き付くようにぶつかり、そのまま地上に落ちた。

ドガアアアアアアン……！……！

ビリー「グラハム！？」

ミコ「龍兄！？」

鐘時「うえwwwwww」

砂煙の中から、2機のフラッグが現れた。

ミコ「あつ……」

ビリー「これは……！」

鐘時「うはつwwwwww すげえwwwwww」

皆は2機のフラッグを見て、驚いた。

2機のフラッグは落下の衝撃で壊れてはいない。  
だが、2機のフラッグの模擬戦用ナイフは互いのコクピットに突き立てられていた。

龍義「…やつと引き分けか…」

グラハム「フツ、そうだな。」

グラハムのフラッグは龍義のフラッグから離れた。

龍義「まあ、」  
龍義「まできたからには、中尉を超えるしかないですね。」

グラハム「フツ、それは楽しみだな。」

その後、グラハムは始末書を山ほど書かされたのは言つまでもない。

空港

ミコ「龍兄、鐘時さん、またね！」

龍義「ああ。」

鐘時「またな WWWWW」

ミコは飛行機に乗つた。

龍義「さてと、俺達も行くか。」

鐘時「俺も日本に帰るわ WWWWW」

龍義「クビ切られるぞ。」

鐘時「冗談だし WWWWW」

龍義「あ、そ。」

龍義達は基地に戻った。

3日後

AEU軍事演習場

グラハム「各国から取材陣が続々と来てるな。」

龍義「AEUもそれ程までの自信が有ると思いますからね。」

龍義はパンフレットを見ながらそつと書いた。

龍義「AEUの次世代型MS、イナクト。テストパイロットは…ん？ パトリック・コーラサワー…？」

龍義はパイロットの『名字』に注目した。

龍義「（コーラサワーって確か…）」

龍義は『ある人物』を思い出そうとした。

ウウ———  
.....

龍義「！」

デモンストレーション開始のサイレンが鳴った。

# グラハムー始まるか。

一人は演習場に入り、観客席に向かつた。

觀客席

龍義「あれが…」

グラハム「ほう…」

龍義とグラハムは「デモンストレーションを行うイナクト」を見ていた。

龍義「あつ  
」

龍義は観客席に座っているビリーを見付けた。

ビリー「MSイナクト…AEU初の太陽エネルギー対応型か。」

「どうやらビリーはこちちらに気付いていない様子だった。と、そこにグラハムが近付いた。

グラハム「A E Iは軌道エレベーターの開発で遅れをとっている。せめてMSだけでもどうにかしたいのだろう。」

ビリー「おや、良いのかい？ MSWADのHースがこんな場所にいて。」

グラハム「フツ、それは龍義にも言われたよ。」

グラハムはビリーの隣に座り、龍義もその隣に座った。

ビリー「飛鳥少尉も…」

龍義「中尉に口説かれましたので。」

ビリー「フツ…しかしA E Iは豪氣だよ。人革の10周年記念式典に新型の発表をぶつけて来るんだから。」

グラハム「どう見る？あの機体を。」

ビリー「どうもこつも…うちのフラッグの猿真似だよ。独創的なのはデザインだけだねえ。」

龍義「それは流石に言い過ぎだ…」

コーラサワー「そこ！ 聞こえてつぞ！ 今なんつった！ ええ！

？ ああ！？

龍義「！」

イナクトからコーラサワーが出てきて、怒鳴り付けた。

グラハム「集音性は高いようだな。」

ビリー「みたいだね。」

龍義「……？」

龍義は不意に空を見上げた。

グラハム「？ どうした？」

龍義「いえ、…なんか、『変な感覚』がしたので。」

グラハム「変な感覚？」

ビリー「なんだい？ それは？」

龍義「…なんか、言い様のない…とてつもなく大きな事が…起こる気がして…」

ビリー「へえ、面白い事を言うね。」

グラハム「飛鳥少尉は勘が鋭いと聞く。なら、その感覚はその勘によるものか？」

龍義「はい。」

グラハム「もし、その勘が当たれば、私の部下としてMSWADに入つてもらおうか。」

ビリー「グラハム？」

龍義「…寧ろ外れて欲しいぐらいですけどね…」

「一ラサワー「おいコラ！ 人の話聞いてんのか！？ おい！ 聞いて…」

ピピッ！

「一ラサワー「ああ！？ アンノウンが！？ ピッ！」こんな時つ

…」

ジジッ…

突如通信が切れた。

「一ラサワー「ツ！ ああ？」

「一ラサワーは上空からこちらに向かってくる『緑色の光を放つ機

体『を見付けた。

ビリー「MS!? 淫いな…もつ1機新型があるなんて…」

グラハム「違うな。あの光…」

龍義「なんだ…? 粒子…?」

そのMSは緩やかにイナクトの前に着地した。

ジジツ…

グラハム「通信が…?」

「皆さん! 誘導に従つて避難をお願いします!」

ビリー「味方ではない…何処の機体だ?」

龍義「此方の機体でもなければ人革連の機体でもなさそうだ。なら、あれは…」

グラハム「『第4勢力』といった所か。」

龍義「ツ…」

そんな一部を除いた周囲の混乱を他所に、コーラサワーは意氣揚々とイナクトに乗つた。

コーラサワー「おいおい何処のどいつだあ? ユニオンか? 人革連か? ま、どっちにしても人様の領土に土足で踏み込んだんだ。タダで済むわけねえよなあ!」

「あの馬鹿、何をする気だ! あの機体にどれだけの開発費を…」

「良いチャンスですよ。これでイナクトの価値は上がる。パトリック・コーラサワーは我が軍のエースではないですか。性格に少々問題はありますが。」

コーラサワー「貴様、俺が誰だか分かつてんのか? AEUのパトリック・コーラサワーだ。模擬戦でも負け知らずのスペシャル様な

んだよおー！」

「……」

「一ラサワー「知らねえとは言わせねーぞー！」

イナクトはソニックブレイドを引き出し、刃が高速で振動し、観客席の人々は耳を塞いだ。

「あの馬鹿……！」

龍義「だが、あの細身の機体なら、ソニックブレイドでいいの！」

「一ラサワー「ええ！？ おいー！」

イナクトはそのMSに向けて走り出し、ソニックブレイドを突き出した。

「ウォンツ！」

そのMSは右腕の大型実体剣 GNSソードを素早く展開させ、イナクトの手を切断した。

ビリー「おおー！」

グラハム「なんと！」

龍義「あんな細身の機体があんな大剣を片腕でいとも簡単に？！」

「一ラサワー「ツ……！ てめえ 分かつてねーだろ……！」

そのMSの攻撃は続いた。

「一ラサワー「俺は！」

イナクトは左腕を斬られ

「一ラサワー「スペシャルで！」

右腕を斬られ

「一ラサワー「2000回で！」

頭部を斬られ

「一ラサワー「模擬戦なんだよおおおおおおおおーーー！」

イナクトは倒れた。

「.....」

目の前の光景に静まり返る観客席。

龍義「...何だ...？あの桃色に輝く剣は...？」

ビリー「まさか...ビーム兵器？！」

龍義「！」

グラハム「失礼。」

グラハムは隣にいた男から双眼鏡を取った。

「な、何を！？」

グラハム「失礼だと言つた。」

グラハムは双眼鏡でそのMSを舐めとる様に見た。  
そして、そのMSの頭部に、『それ』はあつた。

グラハム「...ガン...ダム...あのMSの名前か？」

ビリー「ガン…ダム…」

龍義「ガンダム…？」

龍義は懐から小型の望遠鏡を取り出し、そのMSの頭部を見た。

龍義「あつ…」

確かに、そのMSの頭部 正確には額の部分に確りと『GUINE DAM』と書かれてあつた。

そして、そのMS ガンダムエクシアは背中の「ローン」状の物から緑色の粒子を出し、空へと飛び立つた。

グラハム「またあの光…」

ビリー「推進力もなしでどうして…」

龍義「…まさか…これが『あの感覚』の正体なのか…？」

コーラサワー「奴は何処だ！ 奴は…！ 俺様はパトリック・コーラサワーだ！ 分かったか！？ くつそー…！ 覚えてやがれ…！」

「コーラサワーは元気にイナクトから出で、空の彼方にいるエクシアに向かって吠えた。

グラハム「成る程。最新鋭機イナクト、パイロットの安全性は確かにようだ。しかし、あのMS…軍備増強路線を行くAEUへの牽制…いや、警告と取るべきか。だとしてもここまでされてAEUが黙つている訳がない。」

龍義「ヘリオンがあのMSに接近している。」

グラハム「ほう。」

龍義「しかし…あの出鱈田な機動力は…まるで全ての空戦MSを嘲笑うかのよう…なつ？！」

ビリー「どうしたんだい？」

龍義「ピラーからMSが……？」

ビリー「えつ？」

グラハム「恐らく、あの数は規定以上の戦力だな。」

龍義「……あつ！ 別の方向から攻撃が……？ あれもまさか……？」

グラハム「ビーム兵器、だな。」

ビリー「……しかし、ビーム兵器を開発した国は、ヨーロンビニアかAEUや人革連にもない筈だ。」

グラハム「言つた筈だ、あれは『第4勢力』だと。」

ビリー「ツ……」

龍義「…………」

龍義とビリーはグラハムが運転する車の中にいた。

ビリー「あのMSがAEUの戦力を炙り出してるって？」

グラハム「ああ。AEUが条約で規定されている以上の『軍事力を保有していると、世界に知らしめよう』としている。これは牽制と警告だよ。」

ビリー「どうして、そんな事を？」

グラハム「それはあのガンダムとやらのパイロットに聞いてくれ。」

ビリー「ふむ……」

グラハム「しかし、このままAEUが黙つているとは思えんな。」

龍義「とはいえ、あのガンダムというMSの力は未知数。更にもう何機かいる筈です。」

ビリー「ふむ、それは困ったね。」

龍義「…………」

龍義はただ窓から外を眺めていた。

日本

施設

「ミコちゃん、それを取ってくれるかな？」

ミコ「はい。」

ミコは一緒に住んでいる施設の子達と一緒に朝「はんを作っていた。

「オレこれ見る。」

「やだ！ ボクこっちがいい！」

男の子達はテレビのリモコンの争奪戦を繰り広げていた。

「うるせえな。ニュースでも見てるガキジモ。」

中学生ぐらいの男が男の子達からリモコンを取り上げ、ニュースをやつてるチャンネルに回した。

「お早「じ」やいます。ニュースの時間です。」

「まず最初は人類革新連盟の軌道エレベーター天柱の高軌道ステーションで起きた襲撃事件の続報です。日本時間の今日未明、テロリストと思われるMSにより、人革連の高軌道ステーションが襲撃に

遭いました。』

『グリニッジ標準時午後6時頃、テロリストと思われるMSにより、高軌道ステーションにミサイルが発射されました。しかも正体不明のMSがこれを迎撃、この映像は偶然居合わせたJNNクルーがカメラに収めたものです。』

画面には小さく1機のMS ガンダムヴァーチュが映っていた。

「何だこのMS…？」

「デブつちょだけどかっけえ…！」

「何処のMSだ！？」

「んなもん知らねえよ。」

『事件の最新情報です。たった今、JNNにテロを未然に防止したと主張する団体からビデオメッセージが届けられました。彼らが何者なのか、その内容の真偽の程は明らかではありませんが事件との関連性は深いものと思われます。ノンカットで放送しますのでどうぞご覧下さい。』

そして、世界に『変革を促す』為の演説が始まった。

『地球で生まれ育った全ての人類に報告させて頂きます。私達はソレスター・ビーリング（以下CB）：機動兵器ガンダムを所有する私設武装組織です。』

「武装組織…？」

『CB…？』

『CBは二つの間にかテレビの前にいた。』

『私達CBの活動目的は、この世界から戦争行為を根絶する事にあります。私達は自らの利益の為に行動はしません。戦争根絶という

大きな目的の為に私達は立ち上がつたのです。只今をもつて全ての人類に向けて宣言します。領土、宗教、エネルギー、どのような理由があるうとも私達は全ての戦争行為に対しても武力による介入を開始します。戦争を帮助する国、組織、企業なども我々の武力介入の対象となります。私達はCB。この世から戦争を根絶させる為に創設された武装組織です。繰り返します……』

グラハム「フハハハハハ！ これは傑作だ。戦争を無くす為に武力を行使するとは！ CB…存在自体が矛盾している！」

龍義「確かにそうですね。（そうだ。全ての戦争を終わらせる気なら、このCBは、出口の見えない暗闇の中を…血で濡らしながら突き進むのか…だとしたら…）」

龍義は誰の鼓膜にも響かない程の小さな声でこう呟いた。

龍義「…哀れ…だな…」

## 第1話 ソレスタルビーイング（後書き）

この義翼のサブタイトルは、基本的には『この回に入る本編のサブタイトル』の為、複数のサブタイトルが入ってる事がありますが、中には変更するサブタイトルもあります。

例：変更前、ガンダムマイスター　変更後、ガンダム

## 玲ミコの紹介

玲 ミコ（れい みゆ）

性別、女

誕生日、12月16日

年齢、10～11歳

髪の色、赤

髪型、腰まで伸ばした少し癖つ毛のあるロングヘア

瞳の色、アメジスト

出身地、日本

身長、152cm

龍義の従妹である。

明るく活発な性格だが、6年前の事故で両親を亡くした時は余りのショックで失語症に掛かり、2年間は口を開かず、閉じ籠っていた。

そんなミコを見て、龍義はユニオン軍に入る事を決断した。

今は事故のショックを引き摺りながらも、元気な性格に戻り、施設で暮らしている。

龍義は母親も日本人であるが、ミコの母親はフランス人であり、赤い髪は母親譲りである。

因みに、母親の旧姓は『コーラサワー』である。

第1話で龍義が『「一ラサー』で思い出せつとした人物である。

## 坂田鐘時の紹介

坂田 さかた  
鐘時 かねどき

性別、男

誕生日、6月26日

年齢、22歳

髪の色、青（実際の色は栗色）

髪型、ボサボサなショートヘア

瞳の色、ピンク（実際の色は茶色）

身長、180？

出身地、日本

階級、少尉

性格はとにかくイタい上にウザい。

常にイヤな笑顔を浮かべ、語尾に『~~~~~』が付く。

こんな性格になつたのは、物心がついた辺りで『某大型掲示板』を見てからであり、暇さえあれば、その某掲示板に書き込みをしていたりする。

口癖は『うはつ（ｗｗｗｗｗ）』。

驚いた時は『うえ（ｗｗｗｗｗ）』になる。

ただ、変に空気が読める為、シリアルスな時や本当に危険な時、本気を出す時やキレた時には普通の口調になるが、龍義曰く、鐘時がキ

れた所を見たことほほ無いといつ。

龍義とミコとは家が隣同士で、小学、中学の先輩である為、昔から仲は良い。

女性の体型は所謂『ボン・キュ・ボン』が好みであり、しかも無駄に熱く語つたりする。

が、所謂口リ体型でもイケない事はないそうだ。

パイロットとしては優秀で、龍義の次に実力があり、近い内にフラッグを授けられる予定である。

## 坂田鐘時の紹介（後書き）

名前？ 銀さんのパクリだよ WWWWW

## 第2話 ガンダム（前書き）

龍義はMSWADに所属する事になつたが…

## 第2話 ガンダム

ユニーク基地

龍義「… 今日でこの基地ともお別れか…」

龍義は自室の荷物を片付けながらそう言った。

あの後、グラハムに『やはり少尉の実力は本物のようだ。だから私の推薦としてMSWADに入つてもらおう。何、あの模擬戦のデータが有れば誰だって入れてもらえる。』という、まるで何もかもがグラハムの掌の上で動かされていいるような感じだった。

龍義「… だが、こうなつた以上、腹括つてグラハムの下に行くか。」

龍義は胸のペンドントを開け、ペンドントの中にある心優の写真を見た。

龍義「悪いな、心優。これから忙しくなりそうだ。」

龍義はペンドントを閉じ、荷物を持って自室から出た。

鐘時「ういっすwwwwww」

自室の前には鐘時がいた。

龍義「鐘時か。」

鐘時「……」

龍義「？」

鐘時は無言で龍義の肩に手を置いた。

鐘時「…MSWADに行つても、頑張れよ。」

その鐘時の口調は、何時もの訳の分からぬ口調ではなく、至つて普通の、真面目な口調だった。

龍義「…フツ、言われずともなつ！」

鐘時「ぐはつ…！」

龍義は右手で思いつきり顔面パンチをかました。

鐘時「ちよつ？！ｗｗｗｗｗ　何すんだしｗｗｗｗｗ」

龍義「…義手の右手で殴られて、鼻血だけで済むのはお前だけだな。」

鐘時「鼻血ブーッｗｗｗｗｗ」

龍義「…何年一緒にいよつが、俺にはお前が分からな…いや、分からたくないな…」

龍義はそう言つてその場から去つた。

龍義「セイロン島にC Bが？」

輸送機でフラッグと共にMSWAD基地に向かつていた龍義はそこでセイロン島の紛争にC Bが武力介入を行つた事を聞いた。

龍義「まあ、あんなことを言つて、何もしてなかつたらそれはそれで可笑しい……は？ 中尉がセイロン島に？……何やつてんですか……あの人は……」

何だかんだで輸送機はMSWAD基地に着いた。

MSWAD基地

龍義「飛鳥龍義少尉、只今来ました！」

「うむ、よく来てくれた。……が、突然で申し訳ないが、エーカー中尉を追つてきてくれたまえ。」

龍義「はっ！」

「君の活躍はよく聞いているよ。模擬戦で中尉と相討ちになつたのだろう？」

龍義「はい。」

「しかし……僅か1年でフラッグファイターの称号を手にするとは……やはり『彼ら』の血を受け継ぐ者の力だらうか……」

龍義「……パイロットとしての腕が良かつただけです。」

「そうか。補給が済み次第、出撃してくれ。」

龍義「了解しました！」

龍義「……ハア……何がどうなつていいのやい。」

龍義のフラッグはM S W A D 基地から飛び立ち、セイロン島に向かつていた。

龍義「……フラッグ、自動操縦に入る。」

龍義はフラッグを自動操縦に切り替えた。

龍義「『此方』も補給するか。」

龍義はそう言って右肩を持ち

パシュー！

龍義「クツ……！」

龍義は義手の人工神経を切り離した時に来る痛みに顔を歪めた。

龍義「……」

龍義は義手を取り外し、次に義手の人工神経や人工筋肉を維持する為のナノマシンが入った細長いカプセルを取り出し、それを肩にある義手の取り付け口にあるナノマシンタンクに挿入した。

龍義「……」

カプセルの中にあるナノマシンを全てタンクに注入し、義手を取り付けた。

龍義「クツ……う……！」

龍義は人工神経が接続する時に走る痛みに顔を歪めた。

龍義は義手を着けてからずっと、この痛みに『過去』を見てきた。そう、『あの時の事故』を……

龍義「ハア……ハア……！ 終わったか……」

龍義はそのまま仮眠をし、暫しの間、龍義は寝ていた。

ペペッ！

龍義「ツ！」

龍義は警告音に耳を覚ました。

龍義「あれは……まさか……！」

龍義はフラッグと戦闘をしているエクシアを発見した。

龍義「ガンダム！」

フラッグはエクシアの肩を掴み、そのまま引き取ろうとしたが、エクシアはそれを振りほどき、更にフラッグのリニアライフルをGN

ビームサーベルで破壊した。

龍義「隙あり！」

龍義はその一瞬の隙を突き、ロニアライフルで攻撃した。

「…」

だが、エクシアはギリギリの所で攻撃を躱し、更に龍義のフラッグに接近し、GNソードを振りかざした。

龍義「ツ！」

龍義のフラッグは咄嗟にソニックブレイドを引き出し、プラズマソードにし、エクシアのGNソードを防いだ。

龍義「ぐつー？」

だが、龍義のフラッグは吹っ飛んだ。

龍義「なつ…なんだあのパワーは？！」

龍義が驚愕している隙にエクシアは遙か彼方に消えていった。

龍義「フラッグよりも機体が多少太いだけなのに何なんだ…あのパワーは…」

龍義は啞然とした表情で緑色の光となつたエクシアを見つめた。

龍義「あれが…ガンダムの力…」

『援護を感謝する。』

龍義「…あ、中尉。」

グラハム「ほう、少尉か。」

龍義「問題行為ですよ。勝手に人革領に入つては。」

グラハム「フツ、熟知している。」

龍義「…ガンダムですか。」

グラハム「そうだ。では、戻るぞ。」

龍義「…」

グラハムのフラッグと龍義のフラッグは輸送機に戻つた。

輸送機

ビリー「まさか少尉が来てくれるとはね。」

龍義「まさかガンダムと一緒にとはいへ、戦闘になるとは思いもしませんでした。」

ビリー「ハハツ、これで一層有名人になると思つよ。」

龍義「まあ…」

ビリー「それにしても、本当に予測不能な人だよ君は。」

ビリーはグラハムを見て、そう言つた。

グラハム「ライフルを失つた。始末書ものだな…」

ビリー「その心配はない。今回の戦闘で得られたガンダムのデータはフラッグ1機を失つたとしてもお釣りが来る。接触時に付着した

塗料から足取りを掴めるかも知れないしねえ。」

龍義「（何だろ？…）この帳消し感は…）」

グラハム「それにしても若かつたな… C B のパイロットは。」

ビリー「話したのかい？」

グラハム「まさか。MSの動きに、感情が乗っていたのさ。」

ビリー「ふつ…」

龍義「そこまで…」

「ガンダム、ロストしました。」

グラハム「フラれたな。」

龍義「そのまま転進して此方がやられるよりはマシです。」

グラハム「だな。」

輸送機はユニーク本国に向かつて飛んで行つた。

龍義「（しかし… ガンダムと交戦した事以外で俺が来た意味が無い  
な… ）れじや……）」

MSWAD 基地

「…ハア…」のガンダムとの戦闘データと塗料で帳消しにしてやる

う…」

龍義「（やつぱりか！）」

「少尉には悪いことをしたな。」

龍義「…あ、いえ、一瞬だったとはいえ、ガンダムと交戦出来たのは光榮です。」

「そうか。…しかし、A E Uの新鋭器視察の筈が、とんでもない事になってしまったな。」

グラハム「あのような機体が存在しているとは想像もしていませんでした。」

ビリー「研究する価値があると思いますが…」

「上もそう思つていいようだ。」

「ガンダムを撃した君達3人に転属命令が下りた。」

上司は資料を取り出し、3人に渡した。

グラハム「対ガンダム…調査隊…ですか。」

「新設の部隊だ。正式名は追つて司令部が付けてくれるだろ。…少尉には悪いが、度々の転属になつた。」

龍義「いえ、ガンダムを撃ち、更に交戦までしてしまえば、そうなるのは必然でしょう。」

「そうか。すまないな。」

ビリー「レイフ・エイフマン教授…技術主任を担当するんですか?」

龍義「フラッグの開発者…！」

「上はそれだけ事態を重く見ていいといつ事だ。早急に対応しろ。」

グラハム「はっ！ グラハム・エーカー中尉、飛鳥龍義少尉、ビリー・カタギリ技術顧問、対ガンダム調査隊への転属、受領致しました。」

こうして、グラハム、龍義、ビリーは対ガンダム調査隊に転属する事になった。

ビリー「驚いたな…君はこいつになると予見していたのかい？」

グラハム「私もここまで万能ではないよ。因縁めいたものを感じてはいるがね。それよりも、私よりも一步万能に近い者がいるがな。」

グラハムはそう言つて龍義を見た。

龍義「…今更ですけどやつぱり外れて欲しかったですよ…」

グラハム「フツ、だが、『今更』だな。」

龍義「ええ、今更ですね。…過ぎた事は…過去は変えられませんからね…」

グラハム「だが、私達は『現在』<sup>いま</sup>を生きている。未来に向かってな。」

龍義「…過去に囚われたままでは、未来どころか今すら見えなくなりますからね。」

グラハム「だな。」

## 格納庫

ビリー「機体の受けた衝撃度から見てガンダムの出力はフラッグの6倍はあると思うよ。どんなモーター積んでるんだか…！」

グラハム「出力もそうだが、あの機動性だ。」

ビリー「戦闘データで確認したよ。やはりあの機動性を実現させているのは…」

龍義「あの粒子、ですね。」

ビリー「そう、あのガンダムから出る粒子のような物だよ。どうやら

らあの粒子には非常に高いステルス性を持っているみたいだ。」

グラハム「あの特殊粒子はステルス性の他に、機体制御にも使われている。」

「恐らくは火器にも転用されているじゃ らうつ。」

一人の老人が龍義達の所に歩いてきた。

ビリー「レイフ・エイフマン教授！」

龍義「！ 」この人が…！」

エイフマン「恐ろしい男じゃ。わしらより何十年も先の技術を持つてある。」

龍義「恐ろしい男… イオリア・シュヘンベルグですか…」

グラハム「名は聞いた事はあるな。太陽光発電システムの提唱者だつたな。」

ビリー「しかし、イオリアは2世紀も前の人間…」

龍義「だけど、イオリアはC Bの創設者かも知れないし、違うかも知れない… まあ、イオリアとC Bには少なくとも何らかの繋がりはあるのは否定できない。」

ビリー「なら、あのガンダムもイオリアが…」

龍義「もしかしたら、『ガンダムそのもの』はこの時代の技術で造られているいるのかも知れない。なら、あの粒子が鍵になるのかも知れない。」

エイフマン「ふむ、それは興味深いな。」

龍義「それは… どうも…」

エイフマン「出来る事なら捕獲したいものじゃ。ガンダムという機体を…」

グラハム「同感です。その為にも、この機体をチューインして頂きたい。」

エイフマン「パイロットへの負担は？」

グラハム「無視して頂いて結構。但し、期限は1週間でお願いした

い。」

エイフマン「ほり…無茶を言つ男じゃ。」

グラハム「多少強引でなければガンダムは口説けません。」

カタギリ「彼、メロメロなんですよ。」

ピピッ

グラハムの電話が鳴り、グラハムは電話に出た。

グラハム「私だ。…何！？ ガンダムが出た！？」

龍義「何？！」

グラハム「場所は？…ふむ…2ヶ所？」

龍義「同時行動か。」

グラハム「それで、場所は？…南アフリカとタリビア？！ 分か  
つた。」

龍義「中尉！？」

グラハムは電話を切り、フラッグに乗り込もうとした。

エイフマン「止めておけ。」

だが、それをエイフマンは止めた。

グラハム「何故です！？ 1機はタリビアです。ここからなら行け  
る…！」

エイフマン「ワシは麻薬などというものが心底嫌いでな。焼き払つ  
てくれるというならガンダムを支持したい。」

グラハム「麻薬…？」

エイフマン「奴らは紛争の原因を断ち切る気じや。」

龍義「自分も、麻薬は嫌いですね。アレは人を人ではなくす物です。」

麻酔とかに使われている物以外は全てこの世から消えてほしいものです。」

エイフマン「うむ、そうじやな。」

龍義「後…確かに、南アフリカには鉱物資源の採掘権を発端とした内戦がありましたよね？」

ビリー「まさか、CBはその内戦への武力干渉を…？」

龍義「当たり前でしょう？　CBは全ての戦争に武力介入すると言つてきたのですから。」

エイフマン「確かにな。……それにしても…」

エイフマンは龍義を見た。

エイフマン「飛鳥か…。君の父親の『大輝』とその弟の『玲真』は有能なパイロットじやつた。」

龍義「そうですか。」

エイフマン「もし生きていれば、有能なフラッグファイターになれたのじやね？』…」

龍義「……」

龍義は脳裏に『あの事故』の事を思い出した。

『燃え盛る車』、『瓦礫に埋もれた龍義自身』、そして

龍義「…過去を悔やんだ所で、戻つてくるものなど、ありはしませんから。」

エイフマン「確かにな。」

龍義「それに…」

龍義は左手をサムズアップの形にし、親指を自分の心臓の辺りに突き付けた。

龍義「飛鳥の血を引く者がここにいますから。」

エイフマン「フッ、そりじゃつたな。…さて、フラッグのチューンをせねばな。」

ビリー「はーー！」

エイフマンとビリーはフラッグのチューンの準備に取り掛かった。

グラハム「…フッ、これからだな。」

龍義「ガンダムとの戦い…」

グラハム「その為にも、一層の精進をしなければな。」

龍義「はい。」

グラハムと龍義はガンダムとの戦いを思つた。

### 第3話 対外折衝（前書き）

もうタイトル通りとしか…

### 第3話 対外折衝

日本

ミコ「～～～」

ミコは買い物袋を抱えて施設に帰つていた。

ミコ「…龍兄…」

ミコは空を見上げた。

ミコ「さてと、帰ろつと…」

ミコは前を向いて歩き出そうとした。

ドカッ！

ミコ「キヤッ！？」

ミコは何者かとぶつかり、倒れてしまった。

ミコ「イタタタタタ…！」

「すまなかつた。大丈夫か？」

声からして、男がミコに手を差し伸べた。

ミコ「あ…はい…」

ミコはその男の手を取り、立ち上がった。

ミコ「あ…」

ミコはその男の顔を見た。

その男はミコよりかは年上だが、少年で、更に顔付きは日本人のそれではなく、どちらかというと中東の人の様であった。

「大丈夫か?」

ミコ「あ、はい。」

「そうか。」

そう言って男 少年は立ち去ってしまった。

ミコ「…何なんだろう…?」

ミコはその少年に少し疑問を抱きつつ、施設への帰路についた。

アメリカ

MSWAD基地

龍義「これが…」

龍義達は黒いフラッグを見上げていた。

エイフマン「バツクバツクと各部関節の強化、機体表面の対ビームコーティング、武装はアイリス社が試作した新型のライフルを取り寄せた。」

グラハム「壯觀です…！ プロフェッサー。」

龍義「たつた1週間でここまで…」

ビリー「その代わり、対Gシステムを稼働させても、全速旋回時は12Gも掛かるけどねえ。」

龍義「12Gも…」

龍義はもじこの黒いフラッグ フラッグカスタムを操縦する時、果たしてそんな馬鹿げたGに耐えるのかを思っていた。

グラハム「臨むとこうだ、と言わせてもらひおつ。」

グラハムは強気な表情でビリーを見ていた。

龍義「（…………）」

龍義は「」一週間での出来事を思い出した。

龍義「（北アイルランドのテロ組織リアルIRAの武力によるテロ行為の完全凍結の発表。）これはC Bの介入を恐れての発表だが、これは彼らにガンダムに対抗出来る戦力を保有していない事にもなる。」

だが、CBがいなくなれば、また活動を再開する可能性もある。……  
なら、CBの活動に終わりなど無い。なにせ、『全ての戦争、紛争  
の根絶』を掲げているからな。）

と、そこに一人の男が此方に向かつてきた。

「ほつ……！ これが中尉のフラッグですか。」

龍義「あなた達は……」

「ハワード・メイスン准尉、ダリル・ダッジ総長、グラハム・エー  
カー中尉の要請により、対ガンダム調査隊に着任しました。」

グラハム「来たな。歓迎しよう、フラッグファイター！」「

こうして、ハワードとダリルが新たに対ガンダム調査隊に加わった。

ハワード「まさか君があの噂の期待の大型ルーキーの飛鳥龍義少尉  
とは。」

龍義「はい。」

ダリル「成る程な、軍はそれだけガンダムを重要視しているという  
事か。」

龍義「ですね。」

グラハム「だが、ガンダムは何時何処に現れるのかわからん。」

龍義「ただ、言えるのは、紛争ある所にガンダムは現れるという事  
だけですね。」

グラハム「だな。」

グラハム「私だ。」

グラハムは電話に出た。

グラハム「…………何？ タリビアが？」

龍義「タリビア？」

龍義達は『タリビア』という言葉に少し身構えた。

ダリル「タリビアってまさか…」

ハワード「ガンダムの襲撃を受けた所じゃないか。」

龍義「いや、それだけじゃない。」

ハワード「えつ？」

グラハム「…………ああ、分かった。」

グラハムは電話を切った。

グラハム「タリビアが明日、声明を発表するという情報が入った。」

二人「！」

龍義「タリビアか…」

グラハム「恐らくはユニオンからの撤退を発表する気だな。…まあ、明日になれば分かるや。」

龍義「…………」

グラハムの予想通り、タリビア政府は、軌道エレベーターの電力供給を巡って、ユニオンからの脱退を発表した。

ハワード「遂にガンダムどこ対面ですか。楽しみですよ中尉。」  
グラハム「私もだ。さて、このカスタムフラッグが何処までガンダムに対抗出来るか…いや、そうする必要があると見た。」

龍義「カスタムフラッグでガンダムにある程度でも通用すれば、最低でもこの隊のフラッグもカスタム仕様に出来る可能性はありますね。…まあ、リミッターは付けられますけどね。」

グラハム「フツ、そうだな。では、全員、出撃準備だ。」  
3人「了解！」

龍義らは出撃準備をした。

米軍はタリビア周辺を包囲していた。

龍義「どう出る？ C.B。」

対ガンダム調査隊の面々は、本隊から離れた所を飛んでいた。

ピピッ！

龍義「！」

グラハム「フツ、来たか！」

タリビアに現れたエクシア、ガンダムテュナメス、ガンダムキュリオスは、タリビア軍に攻撃を仕掛けた。

ダリル「此方ではなくタリビア軍を？！」

龍義「いや、CBはタリビアを紛争帮助国と断定した。」

ダリル「！」

龍義「そして、次にタリビアはユーランに脱退を止めて救援を求める。」

ダリル「どういう事だ…？」

龍義「今に分かります。」

ピピッ！

『これより、我が軍はタリビア防衛の為、ガンダムに攻撃を開始する。』

ハワード「…？」

ダリル「何だと！？」

龍義「…やはりというか…いや、やはりか。」

ピピッ！

『ガンダム、撤退を開始。』

龍義「（…恐らく、CBはこんな茶番劇になる事は先刻承知の筈だ。…それでも、CBは武力介入を行う。自らの掲げた『戦争根絶』の為に…）」

フラッグカスタムが行動を開始した。

ピピッ

龍義「ガンダムか。」

龍義のフラッグ達はカスタムフラッグの後を追つた。だが、カスタムフラッグはフラッグの2倍以上のスピードで遠ざかつて行つた。

龍義「速い！ 流石はカスタムフラッグ！」

龍義のフラッグ達も負けじと最大スピードで飛んだ。

龍義「！ あれは…！」

龍義はカスタムフラッグの攻撃を受けているエクシアを見付けた。エクシアはカスタムフラッグの攻撃を受け、海に落ちた。

龍義「（落ちた！？…いや、あれは…）」

ハワード「お見事です、中尉。」

グラハム「逃げられたよ。」

龍義「（やはり…か。）」

グラハム「カスタムフラッグ…一応対抗して見せたが…しかし、水中行動すら可能とは…汎用性が高過ぎるぞ、ガンダム…！」

龍義「人形である以上、ある程度の空気や水の抵抗を受けている可能性はありますけど、あのガンダムは宇宙から降りてきた。そう考えると、ガンダムは全領域を活動可能かと。」

グラハム「成る程、そうか。他のガンダムも撤退した様だ。全機、撤退するぞ。」

3人「了解！」

ガンダム調査隊は撤退した。

龍義「（CBはガンダムという力で一体何をなす？宣言通り戦争根絶の為か。それとも、戦争根絶を盾にした『全く別の目的』か？…それを知るのは、イオリア・シュヘンベルグのみ…か。）」

## 第4話　限界離脱領域、セブンソード、報われぬ魂（前書き）

『限界離脱領域』の所はほぼ速攻で終了する上に、『セブンソード』と『報われぬ魂』の所はただ立ち見しかない。まあ、ユニオン視点での原作通りの流れだから仕方無いが。とはいえ、最後の辺りで『ミコちゃんにはちょっとトライウマを呼び覚ましてみるけどね

## 第4話　限界離脱領域、セブンソード、報われぬ魂

龍義は携帯のテレビ電話でミコと会話をしていた。

龍義「ミコ、そつちばじつだ？」

ミコ『うん、元気いやつてるよ。』

龍義「そうか。」

ミコ「龍兄はビリ。」

龍義「俺か？俺も元気いやつてるよ。」

ミコ「そなんだ。あ、ところで鐘時さんは？」

龍義「鐘時…？いや、すれ違つてばかりだからな…あれ以来会つて無いな。」

ミコ「ダメだよ？一応先輩なんだから、連絡ぐらいしなきや。」

龍義「（一応つてお前…）ああ、そうするよ。…そろそろ時間だから、またな。」

ミコ「うん…」

龍義は携帯のテレビ電話を切つた。

龍義「…………」

ガンダム調査隊は宛もなく飛んでいた。

龍義「（…ただ意味もなく飛んでいる…か…。ヨニオンはタリビアの件によって安泰、人革連と中東、アフリカは所々で紛争が散発している以外はそこまで紛争は起きてはない…か…。）」

そうして、そのまま飛んでいた。

ピピッ！

龍義「！」

軍から通信が送られてきた。

龍義「なんだ？…………なつ？！」

龍義はその通信の内容を見て、驚愕した。

龍義「『人革連の天柱で低軌道ステーションの重力ブロックが分離。地球に向かって落下。』…何だと！？」

グラハム「軍がわざわざ此方に連絡を送るといつ事は、ガンダムか。」

ピピッ！

ハワード「次の通信が…」

龍義「『尚、分離した重力ブロックは、ガンダムによつて地球への落下は防いだ模様。』…はつ？』

龍義はその通信の内容に拍子抜けた。

ダリル「どういう事だ？』

ハワード「ガンダムが人命救助を行つたとも取れるが……？」

龍義「……ガンダムのパイロットに聞いてください。……まあ、言えるとしたら、このガンダムによる人命救助は、『極めて私的な感情』によるものか……」

龍義は最後にそう呟いた。

1週間後

龍義「……モラリア共和国大統領がAEU主要3ヶ国の外相と極秘裏に会談を行つてゐる？」

グラハム「ああ、そうらしいな。」

龍義「という事は、モラリアとCBが事を構えるつもりですか？」

グラハム「フ、そうとしか思えんな。」

龍義「ここまでモラリアが強気なのは、AEUが後ろ楯になつたらか……」

ビリー「その通りだよ。太陽光発電システムを完成させてコロニー開発に乗り出す為には民間軍事会社の人材と技術が不可欠だからね。モラリアとしても縮小した経済を立て直したいという思惑がある。例え自国が戦場になつたとしてもAEUの援助が必要なのが。それに、あわよくば手に入れようと考へてるんじゃないかな……ガンダムを。」

グラハム「ふん……なら、今回は譲るしかないようだな。AEUのエースとやらに。」

龍義「AEUのエース……」

モラリア空軍基地

「ゴーラサワー」「イイーヤツツホオオオーーウウウツツ……」

滑走路にゴーラサワーの駆るイナクト指揮官機が着陸した。

「ゴーラサワー」「よつ！ AEUのエース、パトリック・ゴーラサワーだ！ 助太刀するぜ、モラリア空軍の諸君！」

「な……何て奴だ……」

「ゴーラサワー」「早く来いよガンダム！ ギッタギッタにしてやっかうよお……」

「龍義…………」

龍義はパソコンでモラリアに関する情報を搜していた。

龍義「モラリア共和国……23年前の2284年に建国したヨーロッパ南部に位置する小国。人口は18万と少ないが、300万を越える外国人労働者が国内に在住。約4000社ある民間企業の2割がPMC。PMCとは傭兵の派遣、兵士の育成、兵器輸送及び兵器開

発、軍隊維持それらをビジネスで請け負う民間軍事会社。か…」

龍義は椅子の背もたれに背中を預けた。

龍義「…何故、CBは誘致した民間軍事会社を優遇して発展してきたモラリアを今まで攻撃対象にしなかつた…？ いや、世界の戦争が縮小していけば奴等のビジネスは成り立たなくなる。そして、そのまま自滅するのを待っていた。だが、AEIがモラリアに救済を行つたからか…」

龍義の顔に険しさが出ていた。

龍義「チツ、戦争を糧にしている奴等など…！」

ただ一人の家族であるミコを守る為に軍に入った龍義にとって、戦争を糧にしている（龍義は全ての傭兵がそうではないのは分かっている）傭兵の様な存在に嫌悪感を抱いているのだ。  
無論、全ての傭兵がそうではないのは分かつてはいる。  
だが、そのイメージがどうしても拭いきれないのだ。  
だが、PMCにはその龍義の傭兵のイメージを最悪レベルに具現化している男がいるのだが…

「正午になりました。JNNニューストゥデイ、本日の特集はモラリア共和国で行われたAEIとの合同軍事演習のオペレーション・ドーンについて検証していきます。双方合わせてMSが100機以上も投入されて行われた演習ですが、何故この時期に大規模な軍事

演習を行う必要があるのでしょうか…」

龍義「C Bとの全面対決の為。」

グラハム「だな。飲むか?」

グラハムは「一ヒー缶を龍義に渡した。

龍義「ありがとうございます。」

龍義はその「一ヒー缶を受け取り、口を開けた。

グラハム「例え4対100以上でも、ガンダムが勝つ可能性はあるか?」

龍義「もし、新装備がガンダムに導入されれば、そのたった4に更に軍配が上がる可能性が高くなります。」

グラハム「フツ、新型機の可能性は考えないのか?」

龍義「C Bは、『現状』では4機のガンダムで十分だと思ってますね。」

グラハム「うむ、あの様な性能なら、十分だな。」

龍義「さて、C Bはどうでるか、ですね。」

グラハム「ああ。」

翌日

AEUとモラリア軍による合同軍事演習、オペレーション・ドーンが開始された。

エイフマン「そつか、クジヨウ君と…『元気だったかね?』

ビリー「ええ。」

エイフマン「あの事件の事は?」

ビリー「忘れた…と、言つていました。」

エイフマン「そうか。」

グラハム「（クジヨウ…もしやあの事件の戦況予報士か?）」

龍義「（クジヨウ…? リーサ・クジヨウ…? 確か、カティ・マネキンと並ぶAEUの『元』戦術予報士だつた筈…）」

「現場からの映像届きました。モニター出ます。」

モニターにはモラリア空軍基地に向かう4機のガンダムが映った。

ハワード「何だ? あの装備は?」

ダリル「資料にねえぞ?」

エクシアとテュナメスには、見慣れぬ武装（GNロングブレイド、GNショートブレイド、GNフルシールド）が装備されていた。

龍義「やはり、か。」

グラハム「CB…本気と見た!」

そして、CBのガンダムによる、オペレーション・ドーンに対する武力介入が始まった。

グラハム「ほう…!」

龍義「…ツ!」

ハワード「なつ…?！」

ダリル「コイツは…!」

龍義達は圧倒的な力をまざまざと見せ付けるガンダムに刃を釘付けにしていた。

「一 サワー 「なんじゃそりゃあああああーーー！」

グラハム「フツ、圧倒的だな。」

龍義「あの中に入りたいと思います？」

グラハム「フツ、愚問だな。」

龍義「そうですか。…あつ！」

龍義はエクシアに接近する『青いイナクト』を見付けた。

龍義「なんだ？あの青いイナクトは？」

グラハム「ほう、良い動きだ。」

龍義「だけど、あのカラーーリングは…」

グラハム「PMCの機体か。」

龍義「あのイナクトのパイロットの腕がいいのか、ガンダムのパイロットが未熟なのか…いや、その両方か…？」

その青いイナクトはエクシアを格闘戦で圧倒していた。

そして、エクシアが新型の武装（GNブレイド）で青いイナクトのブレイドライフルを受け止めた時だった。

龍義「（何だ…？ 胸部の辺りが光つて…）ツ！ 武器が？！」  
グラハム「なんと！」

エクシアのGNブレイドは、青いイナクトのブレイドライフルを斬り落とした。

パチッ！

グラハム「むつ？」

龍義「はつ？」

そこで突然モニターの画面が消え、次に画面が現れた時には、他のガンダムが映し出された。

龍義「…流れ弾…？」

グラハム「…らしいな…」

そして、ガンダム4機により、モラリア空軍基地は壊滅的なダメージを受け、ガンダムは何処かに消えた。

ダリル「ガンダムは何処に行つた？」

ハワード「撤退した…？」

グラハム「いや、次のミッションに向かつたのだろう。」

龍義「（次のミッション…モラリア軍…PMC…）ハツ！ ガンダムはPMC本部を狙う気だ！」

ダリル「何？！」

龍義「恐らくガンダムは自身の電波障害を利用して何処か渓谷の様な所を通りてPMC本部に向かつている筈です。」

グラハム「成る程、相手は電波障害が起きてる所にガンダムがいる

と思い、攻撃を仕掛ける。だが、ガンダムは既に其処にはいないと。

「  
龍義「はい。」

ビリー「PMC本部周辺の地形データを出すね。」

ビリーはPMC本部周辺の地形データをモニターに映した。

ハワード「あつ！」

ダリル「こいつは！」

PMC本部の付近には確かに渓谷があつたのだ。

龍義「ガンダムはPMC本部を直接叩く氣だ。」

そして、龍義の読み通り、ガンダムは渓谷を通りてPMC本部を強襲し、多数のMSを撃破。

PMCは無条件降伏をし、ガンダムによる武力介入は終了した。

龍義「……」

エイフマン「終わつたよつだな。」

ビリー「あつ……」

グラハム「どうやらAEUは賭けに負けたよつです。」

ビリー「それはどうかな。確かに20機以上のMSを失つたのは痛いけど、これでAEUは国民感情に後押しされて軍備増強路線を邁進する事になると思つよ。モラリアに貸しを作つた事でPMCとの連携も、より密接になるだらうしね。」

グラハム「……」

エイフマン「悲しいな。どんな華やかな勝利を得よつと、CBは世界から除外される運命にある。」

グラハム「プロフェッサーは彼らが滅びの道を歩んでいくとお考え

ですか？」

エイフマン「まるで、それを求めているかのような行動じゃ。少なくともワシにはそう見える。」

龍義「（自ら滅びを求める、か…。だが、それでもCBはその歩みを止める事はない…その先に滅びしかなくとも、『戦争根絶』の為に戦い続ける。それが、CBの掲げた理念、なのだから…）

龍義は自室でニュースを見ていた。

『まず最初は、昨日モラリア共和国で起こったモラリア軍とAEUの合同軍事演習に対するCBによる武力介入についてのニュースです。非常事態宣言から無条件降伏までの時間は僅か5時間余りでした…』

龍義「そういうと結構長かったな…いや、たったの4機にほぼ一方

的に躊躇されただけか…」

「現時点での戦死者は兵士、民間人を含めて527名で行方不明者の数を含めると犠牲者はまだまだ増えると予想されます。」

龍義「これが…CBが犯した罪か…」

「只今、現地入りした池田特派員と中継が繋がったようです。現場の状況を伝えて貰いましょう。池田さん、お願いします。」

『あつ、はい。池田です。私は今、モラリアの首都リベルに来ています。見えますか？ここは撃墜されたモラリア軍のMSがビルに激突し、崩壊した現場です。ここに来るまでに流れ弾を受けて破壊された民家を幾つも目撃しました。一般市民にも多数の犠牲者が出ていた様子です。』

「私設武装組織CBから犯行声明のよつなものは出されていませんか？」

池田「ええ～、そのような情報は私の所には入つて来ていません。」

龍義「ある訳無いだろ。」

龍義は呆れた様な表情でそう言い放ち、コーヒー缶の口を開けた。

龍義「あのイオリア・シュヘンベルグの演説が唯一無二にして最大の犯行声明だからな。」

龍義はそう言って開けたコーヒー缶を飲んだ。

日本

ミコは施設の子と一緒に買い物に出掛けていた。

「そういえば、ミコちゃんのお兄さんって軍人だよね？」

ミコ「うん、そうだけど？」

「もし、ガンダムと戦つて死んじゃつたら、とか思わないの？」

ミコ「思わないよ。」

「どうして？」

ミコ「だって、龍兄が軍人になつたのは私を守る為だから。もし、ガンダムと戦つても、絶対に死なないから。」

「（凄い自信…）」

その子はミコの話に呆れた様な表情をした。

「ふふつ。まずは洋服を見て、洋服を見て、洋服を見て、洋服を見る」

「皆自分のでしょ。」

「ふふつ。」

ミコ達はそんな会話をするカップルの側を通り抜けた時だった。

ドガアアアアアアアンツツ！－！－！

二人「キヤツ！－！」

突如背後から爆発が起き、ミコ達は思わずしゃがんだ。

「何だ…？　バスが…！」

ミコ「えつ…？」

先程のカップルの男がそう言い、ミコは思わず後ろを向いた。

ミコ「あつ…！」

其処には、爆発したバスと、爆発に巻き込まれた人々が倒れていた。

「バスが爆発したぞ！」

「テロや！　これはテロやで！」

「て…テロ？！」

施設の子はその通行人の男の言葉に怯えた様な表情をした。

「み…ミコちゃん！　早く此処から離れよ！－？」

〃「…………」

施設の子は〃の腕を掴んだが、当の〃は口を開き、口は半開きのまま、動こうとしなかった。

「…〃ちゃん…？」

〃「……あ…ああ……」

「…？」

「君達も早く此処から離れた方がいいよ。」

カップルの男が〃達に近付いた。

〃「あ…ああ…あ…」

「…？」

カップルの男も〃の様子が可笑しい事に気付いた。

〃「ああ…ああああ…！」

〃は燃え上がるバスを見て、『フラッシュバック』を起こしたのだ。

〃「ああああ…」

それは、トンネル内で荷台に置いてある（軌道エレベーターの）資材を派手にばら蒼きながら複数の自動車を捲き込みながら横転し、燃え上がるトラック。

その光景を頭から血を流しながら畳然と座り込んで見る幼い〃と、バイクをまるで乗り捨てたかの様に横倒しにして、同じように畳然と見る今よりも若い鐘時。

そして、瓦礫の中から『這い出でてきた』のは

ミユは頭を両手で抱え込み、発狂したかのように叫び、気を失つてその場で倒れ込んだ。

「あ…//「なやん…?」

「と…とにかく此処から離れよつ。」

カツプルの男がミコをその場から離した。

「アーティスト...」

施設の子はミユの急変した原因がバスの周りで倒れている人達だと  
思った。

三二が急変した原因は燃え上かる火にある時に製作して  
などいなかつた。

## 第5話 無差別報復（前書き）

ミコが倒れたといつ話を聞いた龍義はグラハムに許しを乞い、日本に向かつた。

とにかくこれだけでこの回の内容全部言っちゃってる様なもんだね  
え  
…

龍義は自室でニュースを見ていた。

ニュースは、国際テロネットワーク、ラ・イデンラの声明が流れていた。

龍義「『私設武装組織CBによる武力介入の即時中止、及び武装解除が行われるまで我々は報復活動を続ける事となる。これは悪ではない。我々は人々の代弁者であり、武力で世界を押さえ付ける者達に反抗する正義の使徒である。』…か。どうせCBを理由にしてやりたいだろうが。」

龍義の表情と声には、明らかに怒りを含んでいた。

龍義「それに、CBにそんなしようもない事を言おうがしようが無駄だ。寧ろお前等が紛争帮助の対象になつて駆逐されるだけだろうに。」

ピピッ！

龍義「はい。」

グラハム『私だ。急だが、出動する。』

龍義「…今出た所でガンダムはあるか、テロリストも見付かりませんよ？」

グラハム「フツ、分かつている。私は我慢強く、落ち着きのない男のさ。しかも、姑息な真似をする輩が大の嫌いときている。ナンセンスだが動かすにはいられない。」

龍義「そうですか。分かりました。自分も…」

ペペペペペ…

龍義「すみません、ちょっと…」  
グラハム「ああ、構わない。」

龍義は携帯の電話に出た。

『龍義…』

龍義「鐘時、一体どうした?」

鐘時「どうしたとか、そんなんじゃねえよ…」

龍義「…」

龍義は鐘時の声に焦りを感じた。

龍義「…まさか、ミユがテロに巻き込まれた?」

鐘時「いや、巻き込まれた、というか、テロの現場にはいたんだ。  
無事だつたけどな。」

龍義「…?」

鐘時「えつと…何だつけ? ほら、アレだよアレ。心理的な…なん  
だ? アレ? ストレスだよストレス。」

グラハム「心的外傷後ストレス障害、P.T.S.Dだ。」

鐘時「おつ、それだそれ!」

龍義「…グラハム・エーカー中尉。」

龍義はいつの間にか部屋に入り、鐘時に答えを言つたグラハムの名  
前を言つた。

鐘時「グラハ…なん…だと…」

グラハム「それで、少尉はどうするつもりだ?」

鐘時「うはつ w w w w w モノホンだ w w w w w」

龍義「どうするって?」

鐘時「サインくだはい w w w w w」

グラハム「このまま私と一緒に空を飛ぶか、一旦日本に戻るか。」

鐘時「(- A.)」

龍義「……このまま自分は」

グラハム「いや、一旦日本に戻れ。」

龍義「えつ?」

グラハム「顔に書いてあるぞ。」

龍義「……フツ、はい、分かりました。」

鐘時「(- A.)」

龍義「所で、何故俺に直接掛けなかつたんだ?」

鐘時「ああ、施設の人達にも龍義がM S W A Dの所属になつたつてのを教えたからな。忙しいと思って俺を通じて龍義に知らせてくれつていう事だ。」

龍義「成る程、大体判つた。じゃあ鐘時も」

鐘時「いや、無理。」

龍義「ん?」

鐘時「ビンボーグジ引かされた(- A.)」

龍義「頑張れ。」

鐘時「アイアイサー(- A.)」

龍義「(ウケると思つてゐるのかソレ…?)」

龍義は一時休隊し、ミコのお見舞いに来た。

龍義「 病室、此處か。」

龍義はミコのいる病室の前に来た。

龍義「ミコ…」

龍義は病室の中に入った。

ミコ「スウ…スウ…」

ミコは規則正しい寝息を立て、寝ていた。

龍義「……フツ」

龍義はそのミコの様子に微笑みを浮かべ、右手でミコの前髪を撫で上げた。

ミコ「ん…」

指先がミコの額に触れ、その冷たさにミコは目を覚ました。

ミコ「あ…龍兄…」

龍義「ああ。」

ミコ「あ…うう…う…」

「こは龍義を完全に確認したと同時に田から涙が溢れ出た。

「こ「龍義ッ……」

「こは泣きながら龍義に抱き付いた。

「こ「龍兄！ 龍兄！ 龍兄！ 龍兄！ 龍兄！ 龍兄！」

「こは号泣しながら龍義を連呼した。

龍義「……」

龍義は「こを優しく抱き締めた。

「こ「うう…」

龍義「よしよし。」

龍義はしゃくりをあげる「こ」の背中を優しく撫でたり、頭を優しく撫でたりした。

龍義は「こ」の頭を撫でながらひつひつと泣いた。

龍義「楽になつたか？」

「こ「うえ…」

龍義「そつが。」

ミコ「…あー 龍兄…「めんなさい…」

龍義「いいさ。俺だつて軍人としての職務を果たそつとしてたさ。」

ミコ「えつ?」

龍義「ホント、グラハム・エーカー中尉には感謝するしかないな。」

龍義は窓の向こう側を見上げた。

その後、ラ・イデンラはCBによつて壊滅した。

龍義「…そつですか。」

グラハム『どうやら各国の諜報機関も協力した様だ。』

龍義「CBがラ・イデンラを潰すと見てか…」

グラハム「だな。」

龍義「では、明日になつたら戻ります。」

グラハム「そつか、分かつた。」

ピッ

龍義「…」

龍義「それじゃ、またな。」

リゴ「うん。」

龍義はアメリカへ戻つて行つた。

リゴ「龍兄…」

## 第6話 流星の夜（メテオーアナハト）（前書き）

龍義と鐘時は束の間の休日を貰い、ミコの誕生日プレゼントを渡す為に日本に帰国したが…

この回は裏設定みたいなものが幾つか出でています。

## 第6話 流星の夜（メテオーラナハト）

12月13日

日本

秋葉原

鐘時「うはつWWWWWW 久し振りのアWWWWWWキWWWWWWバWWWW  
WW みWWなWWぎWWつWWてWWキタWWWWWW（。 。 ）（。 。 ）  
（ 。 ）（ ）（。 ）（ 。 ）（ 。 ）（ 。 ）  
！—！—！」

龍義「…………」

龍義と鐘時は休暇を取り、日本に帰国していた。

その目的は、3日後のミコの誕生日にプレゼントをあげよつとこう  
事だが…

「おおっ？！『蒼ブルーサンダー雷帝エンペラー』じゃないか。」

鐘時「うひひひWWWWWW」

龍義「（なんという厨二病。）」

鐘時はアキバの知り合いには蒼き雷帝と呼ばれている。

「久し振り～。」

「遂にフラッグファイターになつたんだつて？」

## 鐘時「イエスッ！！！」

龍義「（だよな…）ハイ、11月にフラッグを手に入れたんだよな…」

鐘時

龍義「…勝手にしろ…！」

କରିବାକୁ କାହାର କାହାର କାହାର କାହାର କାହାର କାହାର

鐘時は異常なまでのハイテンションでアキバの知り合い達と共に秋葉原の所謂『オタクの聖地』へ消えて行つた。

龍義一八

龍義は溜め息を吐き、ノックのプレゼントを探しに行つた。

龍義は「さくの髪飾りにするかな…」

龍義「（俺達が休暇をとれたのは、ニーイオンが同盟国領内での紛争事変のみCBに対応すると発表したからだ。AEUも同じ対応を発表しているが、人革連は断固たる対決姿勢を見せてる……いや、今はこんな話は止めよう。）……ん、12月の誕生石……ターコイズか。よし、これにするか。」

龍義はターコイズの髪飾りを購入した。

12月14日

秋葉原

龍義「.....」

お帰りなさいませこ主人様

龍義は鐘時に連れられて『メイド喫茶』に来ていた。

龍義一  
何故此處に？

「あよつと法家の寶刀を取つてくる。」

んぜ！！！

龍喜 ああ そこがな  
飛鳥家は生き伝れる名刀』だからだ

龍義は黒い笑顔でそう言った。

鐘時「ガクガク（（（（；；。））））ブルブル」

鐘時は龍義のその黒い笑顔に恐怖で震え上がった。

龍義「（伝家の宝刀か…）。此處で昔飛鳥家で起こつた事を地の文で

語らせるのも悪くはないのかもな。」

此處でかつて飛鳥家で起きた出来事を話そう。

飛鳥家は広大な土地（東京ドーム3個分）と広大な日本家屋（部屋数五十数部屋で2階建てで地下2階）を持っていたが、経営していた会社の財政が悪化し、土地と家、財産、そして、当時まだ小学生だった真を手放す事になってしまった。

が、そこに玲家が真を養子にし、土地、家、財産を引き取った。だが、その玲家も僅か数年で経営していた会社の財政が悪化してしまった。

実は、飛鳥家と玲家は元々とある部族の分家に当たるが、百数十年にその部族から独立した経緯があり、それを妬んだ本家が介入を行つたのだ。

結局、玲家はその部族に引き戻されてしまったが、其處に坂田鐘谷（かねだに）という男が現れた。

鐘谷は、鐘時の祖父であり、大揮と真の父親（龍義とミコの祖父にあたる）の幼馴染みでもある。

元々坂田家は代々続いてきた刀鍛冶の家系だが、Eカーボンが登場してから、Eカーボンの加工に着手し、様々なEカーボンの物を作り出し、それが評価され、軌道エレベーターの資材の加工の権利を得て、巨万の富を得た（坂田家の軌道エレベーターの資材の加工場はアメリカに設立してあり、刀鍛冶は日本の本社で細々と続いている）。

更に龍義の義手の人工骨と人工皮膚を製造してゐるのも坂田家である。その金で玲家が手放した飛鳥家の土地、家、財産を拾い上げ、真を飛鳥家に戻した。

ただ、真は玲の姓のままを希望した為、名字は玲のままである。

因みに、大揮と真は軍人としての責務を果たす為に飛鳥家の家に住まず、鐘谷の息子で鐘時の父親の鐘義が貸してゐるマンションに住んでいた。

鐘時は元々坂田家の跡取りだが、ご覧のザマなので弟の鐘太郎が跡取りになつてゐる。

12月15日

龍義一 漫画喫茶行つて時間潰すぞ。

龍義「.....」

龍義達は漫画喫茶に入つた。

鐘時は工口画像を書き集めていた。

龍義「…………」

龍義はCBに関する記事を片つ端から見ていた。

龍義「CBを批判する者…CBを称賛する者…だが、CBはそんな周りの声などお構い無く、戦争根絶を行う。矛盾をはらんでな…」

龍義は次にCBに関する持論を行う個人サイトに目を通した。そして、時間の感覚が軽く麻痺していた時だった。

ピピッ… ピピッ…

龍義「ん？」

龍義は着信音の鳴った携帯に対し、その表情を険しくした。何故なら、その着信音の鳴った携帯は、自分ではなく、『軍の支給品』だからだ。

龍義「はい。」

『飛鳥龍義少尉、だな?』

龍義「…緊急ですか?」

「ああ、そうだ。実は…」

龍義「なつ?…」

龍義は軍人の言葉に我が耳を疑つた。

龍義「ラグランジューのコニオンの資源衛星が謎の爆発事故…?…」「そうだ。このままだとグリーンジ標準時午後3時には地球に落ち

る。」

龍義「日本時間午前0時に……！？」

「IJのまま落ちれば、地上に甚大な被害が及ぶ。」

龍義「……一つ聞いていいですか？」

「何だ？」

龍義「何故自分に電話を……？」

「落下被害予測地域に日本が含まれているからだ。」

龍義「ツ！？」

「これは坂田鐘時少尉にも伝えておく。」

龍義「いえ、自分から伝えておきます。」

「そうか。では、午後5時に横須賀基地に向かえ。」

龍義「了解しました。」

「バッ

龍義「……//コ……マズイ事になってきた様だ……」

100

鐘時「なつ……何だつて？！　マジかよそれ！？」

龍義「ああ、俺も信じられないがマジだ。」

鐘時「クツ！　何でこんな時に！」

龍義「午後5時にとか言つてるが、さつさと行つた方がいい。」

鐘時「ああ、そうだな。」

龍義達は横須賀基地に向かつた。

「予定より早いが、よく来た。」

龍義「フラッグ2機を頼みます。」

「フツ、フラッグは既に用意してある。」

龍義「有り難うございます。」

鐘時「フラッグの状態は？」

「はい、1機のフラッグには6連装ミサイルランチャー×2基を装備し、ミサイルにはそれぞれ14発を内蔵。もう1機のフラッグには大型ミサイルを3×2発搭載しています。」

鐘時「つーかさ、俺達がやる事つて、落ちてきた衛星を撃ち壊すのか？」

龍義「衛星は資源採掘のために中がくりぬかれてあるからな。大気圏内への突入の衝撃で崩壊する。」

鐘時「成る程ね、破片か。」

「出撃命令が下るまで、この基地で待機しろ。」

二人「はっ！」

龍義「…………」  
鐘時「…………」

龍義と鐘時はパイロットスーツに着替え、無言で待機していた。

鐘時「……なあ……？」

龍義「ん？」

鐘時「俺達だけじゃ破片の迎撃は無理じゃね？　幾ら他から仲間が  
来ても……」

龍義「弱音を吐くな。宇宙から他の部族が迎撃をしている。俺達が  
やるべき事は、危険な破片を破壊する事だ。」

鐘時「……ああ、そうだな。」

龍義「……」

そして、出撃命令が下された。

鐘時「おっし！　逝きますか！」

龍義「漢字間違ってるぞ。」

『発進、どうぞ。』

鐘時「坂田鐘時、出るぜー！」

鐘時のミサイルランチャーフラッシュは出撃した。

龍義「（やうだ。やるべき事はただ一つ、守る事だ。）

『発進、どうぞ。』

龍義「飛鳥龍義、出るー。」

龍義の大型ミサイルフラッシュも出撃した。

鐘時「さーと、ちやつちやと終わらせますか。」

龍義「そんな簡単な話じやないぞ、これは。」

鐘時「はいはい、分かつてますつて。」

と、こんな会話を何度も、成層圏に着いたとした時だった。

龍義「ん？！」

龍義は突然何かに反応し、辺りを見渡した。

龍義「…ハツ！ あれは！」

鐘時「ん？ ビツした？」

龍義「…ガンダム。」

鐘時「えつ！？」

龍義は同じく成層圏に向かう緑色の光と粒子を見付けたのだ。  
そんな物を放出するのはガンダム以外有り得なかつた。

鐘時「ちよつ wwwww 何でこんな時にwwwww」

龍義「（何故こんな時にガンダムが…？ しかも、あの機体は…『  
羽付き』か…）」

機首の形状が確認されてるものと大きく異なり、更に後部 脚

部には大型のバー二アが装備してあるが、間違いなく羽付き  
ガンダムキュリオスである。

今のキュリオスは、『ガスト』と呼ばれる高高度戦闘装備追加型を  
装備している。

ピピッ！

龍義「ん？ 何だ？」

『資源衛星にガンダムが出現。現在、衛星を破壊している。』  
鐘時「ちょっと wwwwww ガンダムとか wwwww 何考えてんだ  
し wwwww』

龍義「それはガンダムのパイロットにでも聞いてくればいい。通信  
が出来たらな。」

鐘時「：まあな。」

龍義「兎に角今はガンダムが破壊して落ちてくる破片を片付ける。  
鐘時「了解つと。」

2機のフラッグは、キュリオスガストと共に成層圏に到達した。

龍義「来るぞ！」

宇宙から大量の衛星の破片が落下して来た。

鐘時「ちょっと wwwwww 数多い wwwww 死ぬる wwwww  
W』

龍義「宇宙にいるガンダムが細かく碎いたんだろ。ほら、俺達もさ  
つさとやるぞ。」

鐘時「OK！」

鐘時のフラッグはミサイルを数発撃つた。

ババババババババババババッ：

そのミサイルから子ミサイルが放たれ、破片を次々と破壊した。

龍義「あれは……！」

龍義のフラッグがリニアライフルで破片を破壊してる時に大きな破片が落ちてきた。

龍義「碎く！」

龍義のフラッグは大型ミサイルを撃ち、その大きな破片を破壊した。

龍義「ツ……」

龍義はキュリオスガストを見た。

キュリオスガストは変形を繰り返しながら破片を次々と破壊していく。

こちらを攻撃する様子は微塵も確認されなかつた。

龍義「負けてられないな。」

龍義はフツと微笑みながらそう言い、そして、顔を引き締め、落ちてくる破片に向けて大型ミサイルのトリガーを引いた。

日本

避難所

ミコ「……」

ミコは12月に入つてから退院していた。

今、施設の者達は全員避難所にいた。

資源衛星の落下被害予測地域に日本も含まれていてるからだ。

「うわー！」

「ねえねえ！ 見て見てー！」

ミコ「ん？」

ミコは子供に手をひかれ、窓を見た。

ミコ「…あー」

空には無数の『流れ星』が流れていた。

「流れ星がいっぱあーい！」

「きれいー！」

ミコ「…うそ、そうだね。」

「…ケツ、流石だぜ。ホント、なんも分かっちゃいねえからな。」

ミコ「…」

「ま、大きくなつたらあの流れ星の事も分かるだろうしな。」

ミコ「…そうだね。」

この事件は後に『流星の夜』<sup>メテオーナハト</sup>と呼ばれる事になる。

コニオンではこの事件そのものをCBによるテロ行為と結論づけようとしているが、市民や龍義ら軍人の目撃情報や証言によつ、その結論は否定されつつある。

鐘時「ああっ！ 畜生つたがーー！」

龍義と鐘時は急いで施設に向かつていた。

本来は17日の午前中まで休暇だったが、ガンダムを目撃した為、報告の為に今日、16日の午後にはアメリカに戻らなければならなくなつたのだ。

龍義「結局お前はミコへのプレゼントが現金で15万円かよ。」

ドガツー！

鐘時「グハツー！」

鐘時は顔面を思いつきり殴られた。

龍義「先に逝つてろ、バカが。」

鐘時「ウイーツス。」

結局龍義一人で施設に向かつた。

施設前

龍義「ハア…ハア…ハア…！」

ミコ「あつ…！？ 龍兄？！」

と、そこに買い物に出かけようとしていたミコと鉢合せになつた。

龍義「ああ…ミコ、誕生日おめでとう。」

龍義はそう言つてミコに小さな箱を渡した。

ミコ「あ…龍兄…ありがとう…」

龍義「悪いが、今年は誕生日を祝えそうにない。じゃあな。」

ミコ「あ…！ 龍兄、頑張つてね！」

龍義「…フツ、ああ！」

龍義は駆け出した。

ミコ「……」

ミコは箱を開けた。

中には、龍義が誕生日プレゼントとして買ったターコイズの髪飾りが入つていた。

ミコ「龍兄…」

ミコはその髪飾りを着けた。

ミコ「フフッ、ありがとつ、龍兄！」

ミコは満足そうに笑い、買い物に向かつた。

## 第7話 大国の威信、ガンダム鹵獲作戦、超兵（前書き）

龍義とグラハムは人革連がガンダム鹵獲作戦を行うという情報を入手し、宇宙に上ることになった。

## 第7話 大国の威信、ガンダム鹵獲作戦、超兵

龍義「人革連がガンダム鹵獲作戦を…？」

グラハム「ああ、そうだ。」

ビリー「巡洋艦が偶然捉えた映像がある。」

ビリーはその映像を出した。

龍義「…ツ！ これは……通信機…？」

ビリー「その通りだよ。恐らく、人革連はガンダムの特性を理由して、ガンダムの母船を炙り出そうとしているんだよ。」

龍義「ガンダムの母船…確かにこの4ヶ月で60回も介入していますからね、幾らガンダムといえども、補給は必要か…」

グラハム「そこでだ、私達だけで宇宙に上がろうと思つ。」

龍義「なつ…？！ 宇宙に…？」

グラハム「上からの許可は得てある。」

ビリー「その巡洋艦からオービットフラッギング2機を借用して貰つたからね。」

龍義「だけど…自分は宇宙の経験は…」

グラハム「フツ、私も宇宙の経験は無い。」

龍義「なつ…？！」

グラハム「だが、人革連のパイロットからなら、ガンダムに関する話を聞けるかもな。」

龍義「…まるで歯獲作戦が失敗するような口振りですね。」

グラハム「フツ、それはどうかな。行くぞ。」

龍義「はい！」

ビリー「ついでだから僕も行こう。」

グラハム「フツ、期待出来るものがあるかどうかは知らんがな。」  
ビリー「その『期待出来るもの』を見れるチャンスかも知れないんだけどね。」

グラハム「フツ、勝手にしろ。」

こうして、グラハム、龍義、ビリーの3人で宇宙に向かう事になった。

軌道エレベータータワー

リニアトレイン

龍義「…………」

ビリー「…………」

グラハム「ムムムム……」

龍義「落ち着いて下さい。」

グラハム「フツ、私は我慢弱く、落ち着きのない男なのさ。」

龍義「それはこの前聞きました。」

グラハム「ムツ、そうか。」

龍義「ハア……何とか着いたか……」

「グラハム・エーカー中尉、飛鳥龍義少尉、ビリー・カタギリ技術顧問、此方です。」

グラハム「ん。」

グラハム達は兵士の後を着いて行つた。

巡洋艦

「艦長、グラハム中尉以下2名を連れて来ました。」

「よく来たな。」

3人「はっ！」

「事態は急を要する、発進する。」

巡洋艦は人革連とCBが『戦闘』を行つてゐる所へ向かつた。

龍義「……？」

巡洋艦は戦闘エリアに到達した。

だが、既に戦闘は終了してしまった様で、其処にはティエレン宇宙型とラオホウ級輸送艦の残骸しか残っていなかつた。

グラハム「どうやら、作戦は失敗した様だな。」

龍義「ガンダムを鹵獲出来ずにこのザマなら責任者は確實に終わつてますね。」

ピピッ！

「ティエレン2機確認しました！」

龍義「2機だけ…？」

グラハム「生き残りか。」

「救助作業を行う。」

巡洋艦は2機のティエレンに接近し、収容した。

龍義「…で、ここからが自分達の出番…ですか。」

グラハム「ああ、そうだな。」

龍義とグラハムはティエレンのパイロットがいる部屋の前にいた。現在、巡洋艦は人革連の軌道エレベーター、天柱に向かつていた。ティエレンとパイロットを送り届ける為だ。

龍義達はその間にティエレンのパイロットからガンダムに関する情報を得るという事だ。

龍義「……」

龍義はこの部屋の前に来た時から、何か『違和感』を感じていた。

グラハム「では、入るぞ。」

龍義「あ、はい。」

二人はその部屋の中に入つた。

龍義「！」

グラハム「ほう、まさかこんな所で出会えるとは…『ロシアの荒熊』、セルゲイ・スミルノフ中佐。」

其処にいたのは、七三分けの髪型に左耳の上から頬にかけて大きな傷跡がある人革連のパイロットスーツ姿の中年の男と、見たことの無いパイロットスーツを着ている銀髪金眼の少女がいた。男の方はグラハムが言つてた通り、セルゲイ・スミルノフである。

セルゲイ「そういう貴官は、あの『グラハム・マニユーバ』を編み出したグラハム・エーカー中尉だな。」

グラハム「その通りだと言わせてもらおう。」

グラハムとセルゲイはにらみ合いの様なものをしていた。

龍義「……」

「何か？」

龍義「いや…別に…中尉、本題に入りましょう。」

グラハム「ん、ああ、そうだな。では、单刀直入に言つ。ガンダムを鹵獲しようとしていたな？」

「中佐。」

セルゲイ「ん。ああ、その通りだ。」

グラハム「では、出来うる限りの『ガンダムに関する新情報』をお教え頂けないだらうか?」

セルゲイ「…それを教えて、何の為になる?」

龍義「対ガンダム調査隊としての任務を果たす為です。」

グラハム「一方的だと嘲笑つても構わんさ。だが、それでもガンダムの情報が欲しいのだよ。」

セルゲイ「…………」

龍義「勿論、そのまま黙つていっても構いません。天柱に着いたら下ろしてあげますから。」

セルゲイ「（コイツは…）」

セルゲイは龍義の目を見た。

セルゲイ「（若いながらもある程度の強さと覚悟を兼ね備えた目をしているな…）」

「中佐…？」

セルゲイ「…分かった。ガンダムに関する新情報を言おう。」

セルゲイが話した内容はこうだった。

CBの母艦の確認。

オーバーホールされていたガンダム（デュナメス）。

デカブツ（ヴァーチュ）の装甲のパージ機能。

羽付き（キュリオス）のシールドの機能。

以上の事を話した。

グラハム「なんと!」

龍義「（母艦やオーバーホールやシールドはともかく、装甲のパージ機能は想定外だったな。）」

セルゲイ「…これが私が得た新情報の全てだ。」

龍義「そうですか。ありがとうございます。」

そして、巡洋艦は天柱に到着し、セルゲイと少女  
ーリスを機体と共に人革連に引き渡した。

ソーマ・ピ

MSWAD基地

自室

龍義「…………」

龍義はソーマの事を思い出していた。

龍義「（何だ…？あのソーマ・ペーリスというのは…？）彼女から強い『違和感』を感じた…。理解出来ない、だが、理解出来そうな相反する違和感…それが、彼女から発する『何か』…」

龍義はそこまで思考し、もつ寝よつと思つた。

龍義「…………」

そして、龍義は就寝した。  
脳裏に『何か』を焼き付かせたまま…

数日後

龍義「ツ……」

龍義はテレビのニュースに目を釘付けにした。ニュースは、人革連のコロニー、全球には、孤児に対し、人体実験を行う超兵機関があり、その超兵機関はガンダムによつて破壊されたという情報が流れていった。

龍義「超兵……？」

龍義は超兵といつ言葉でソーマを連想した。

龍義「……何で超兵でソーマ・ピーリスの事を思い浮かぶ……？　まさか、彼女は超兵……なのか……？」

龍義はそれは自分の勝手で決めた事だとは分かっている。だが、そう思わずにはいられなかつた。ただ、ソーマは龍義が思つてゐる通り、超兵なのだ。

龍義「……」

龍義はテレビに流れているニュースをもう一度見た。

## 第8話 教義の果てに（前書き）

龍義達ガンダム調査隊はアザテイスタン国内の内乱を抑えるという名目でアザテイスタンに来た。

輸送機

龍義「……」

対ガンダム調査隊は、アザデイスタンに向かつっていた。

『表向き』の理由は、アザデイスタンの宗教指導者であるマスード・ラフマディ師が何者かに拉致され、保守派が暴動を起こし、これ以上の内紛を抑えたいアザデイスタン改革派の要請を受けての事だが、アザデイスタンは異文化を嫌う者が多く、寧ろガンダム調査隊が来る事で『内紛の危険性が高まる』のだが、ガンダム調査隊はそれを利用し、『ガンダムを誘き寄せ、あわよくば歯獲する』。それこそがガンダム調査隊の『真の目的』なのだ。

龍義「……チツ、やなものだ。」

グラハム「それは私も同感だ。だが、一度内紛が起これば、必ずC Bが介入する。」

龍義「……自分達がその内紛の切っ掛けのひとつになりかねない事にですよ。」

ビリー「確かにね。アザデイスタンは異文化を嫌っているからね。」

龍義「……行き過ぎた信仰が内紛を呼ぶ、か……」

龍義は其処で一度現状から離れ、ビリーとレイフマンの会話を思い出した。

ビリー『やはり、この特殊粒子は多様変異性フォトンでしたか。』  
エイフマン『それだけではないぞ。ガンダムは特殊粒子そのものを機関部で作り出している。でなければ、あの航続距離と作戦行動時間の長さが説明出来ん。』

ビリー『現在、ガンダムが4機しか現れない事と関連がありそうですね。』

エイフマン『実に恐ろしきはイオリア・シュヘンベルグよ。2世紀以上も前にこの特殊粒子を発見し、基礎理論を固めていたのだからな。』

ビリー『そのような人物が戦争根絶なんていう夢みたいな行動を何故始めたのでしょうか?』

エイフマン『紛争の火種を抱えたまま宇宙に進出する人類への警告……。そうワシは見ておるがな。』

龍義『（紛争の火種を抱えたまま宇宙に進出する人類への警告か……。イオリアはその超越した頭脳で何が分かつた？　何を感じ取つた？　希望か？　それとも絶望か？……ダメだな。俺じや何も解りっこない……か。）』

アザディスタン近郊

ユニオン軍簡易基地

輸送機は基地内の滑走路に着地した。

ダリル「クソツ、なんて暑さだ。」

ハワード「何故こんな辺境に基地を？」

グラハム「アザディスタンの者は異文化を嫌う者が大勢いると聞く。町の近くで基地を置いて、大勢の市民の怒りを買つてみる、武装して攻めてくるぞ。」

ハワード「…ツ！？」

ハワードは背筋に冷たいものが走った。

龍義「見て下さい、施設は簡素ですが、バリケードは丈夫に作られていますから。」

ハワード「やはり此処も安全ではないのか…」

『ヴァ～カ WWWWW 何の為に俺達が駆り出されたと思つてんだ  
し WWWWW』

龍義「ツ！？」

龍義は『聞き覚えのある声』に驚き、上を見上げた。

其処には、1機のフラッグが飛んでいた。

そして、飛行形態からMS形態に変形し、地面に降り立つた。

ハワード「変形した？！」

ダリル「なんてヤツだ！」

グラハム「ほう…」

龍義「（『大きく赤く描かれた』に青い背景に無数に走る横線』の  
パーソナルマーク…まさか！？）」

そして、そのフラッグのコクピットから出たのは

「よお WWWWW 野郎共 WWWWW」

龍義「やつぱりかよ…」…『鐘時』…「

鐘時 だつた。

鐘時「ハハハハハハハ WWWWWWW 普通に変形するだけなら、俺にも出来たぜ WWWWW」

グラハム「フツ、なかなか骨のあるヤツだ。」

鐘時「どうも WWWWW」

龍義「.....」

鐘時「ま、龍義、此処は俺達が守つといてやるから安心しろし WWWWW」

龍義「ああ、そうしておく。」

鐘時「んじゃ、俺は偵察に行くからな WWWWW」

鐘時はフラッグに乗り込み、フラッグは飛び去つた。

龍義「.....ハア.....」

龍義は一抹の不安を感じ、溜め息を吐いた。

太陽光発電受信アンテナ施設

グラハムは真っ先にアンテナが狙われると読み、ガンダム調査隊はその付近で待機していた。

龍義「んつ！」

龍義はナノマシンの注入を終え、義手を接続した。

グラハム「龍義。」

龍義「中尉？」

グラハム「何故右腕の再生治療を行わなかつたんだ？　幾ら右腕を肩から丸ごと無くしていいたとしても、時間は掛かるが、再生は出来る筈だ。」

龍義「…忘れたくないからです。」

グラハム「…」

龍義「父さんや母さん、叔父さん達の事を、そして、あの事故の事を。」

グラハム「そうか。」

龍義「まあ、そろそろこれも新しい物にしないとダメなんですけどね。」

龍義は右手を握つて開いた。

グラハム「なら、無茶はするな。」

龍義「分かりました。」

グラハムはカスタムフラッグに乗り込み、龍義もフラッグに乗り込んだ。

その直後だった。

ドガアツ！

龍義「！　爆発！」

突如、アンテナを護衛していた1機のアンフが攻撃され、爆発したのだ。

攻撃したのは、同じようにアンテナを護衛していた筈のアンフだった。

実はアンフのパイロットの中に超保守派の者が紛れ込んでおり、アンテナを破壊しようと攻撃を始めたのだ。

グラハム「やはりアンテナを狙つか。行くぞ！ フラッグファイター！」

3人「了解！」

ガンダム調査隊はアンテナ防衛に向かつた。

ハワード「中尉、味方同士でやり合つてますぜー。」

ダリル「どうします？」

グラハム「どちらが裏切り者だ……！」

そう、端から見れば同じアンフ同士が戦つているのだ。  
しかも識別コードがあつたとしても、元は見方同士、区別など付ける筈もなかつた。

龍義「こいつなつたら……。」

グラハム「龍義？」

龍義はこのままでは埒があかないと思い、武装だけでも破壊しようと動き出した。

龍義「ツー！」

だが、龍義のフラッグは急に機体を翻した。

ドウツ！ ドウツ！

その直後、何処からか粒子ビームが放たれ、アンフを次々と撃破した。

龍義「この粒子ビームの光は……！」

グラハム「ガンダムか！？」

アンフを撃破したのは、テュナメスだった。

龍義「やはり紛争を嗅ぎ付けたのか……」

ピーピーピーッ！

龍義「ツ！？」

グラハム「ミサイルだと！？」

龍義「くつ……！」

龍義のフラッグとテュナメスは大量のミサイルを撃ち落とそうとしたが、撃ち落とし切れず、アンテナに着弾、アンテナは崩壊した。

龍義「……クツ！」

龍義はアンテナを攻撃した敵を追つた。

ハワード「少尉！？」

グラハム「ハワード、ダリル、龍義と共にミサイル攻撃をした敵を追え！ ガンダムは私がやる。」

ダリル「了解！」

ハワード「ガンダムは任せますぜ！」

ハワードとダリルのフラッグも敵を追つた。

龍義「待て！！」

龍義のフラッグは尚も逃げる敵に攻撃を始めた。だが、その敵は後ろを見せているのにも関わらず、まるで後ろに目が付いているかの様な動きで攻撃を躲した。

龍義「躲した？！　チツ、なんて奴だ！　なら！」

龍義のフラッグはMS形態に変形し、右手にプラズマソード化したソニックブレードを持ち、その敵に肉薄した。

「チツ！」

その敵は観念したのか、右手の得物で唾競り合いをした。

龍義「！？」

唾競り合いのスパークで一瞬浮かび上がった敵の姿。

その正体は、かつてエクシアを圧倒していた青いイナクトだった。

龍義「（何故PMCの機体がこんな所に…！？　だが、コイツが主犯各なら…）」

龍義のフラッグは左手のリニアライフルを捨て、プラズマソード化

したソニックブレイドを持った。

龍義「」の紛争を終わらせてやるシー。」

龍義のフラッグは両手のプラズマソードでの連続攻撃に出た。

これはあの映像から推測して、単純な技量ならあちらの方が上と読み、それならば反撃の隙を与えない程の連続攻撃を行えばいいという即座の判断だった。

龍義「...」

龍義のフラッグは素早い動きで連續攻撃を繰り出した。

トトロの魔術

青いイナクトは龍義のフラッグに押されていた。

龍義 - そいじ -

龍義のフラッグの一閃が、青いイナクトの右肩の装甲を丸ごと斬り落とした。

「くつ…！ だけどなあ！」

青いイナクトはスマート弾を撃ち、周囲をスマートが覆った。

龍義「スマーケ！  
だが！」

龍義のフラッグは右腕のティフーンスロッドを高速回転させ、スマーケを吹き飛ばし

龍義「まだまだ！」

龍義のフラッグは更に畳み掛けた。

「！」

龍義「これで終わらせ

「

ズキンッ！！

龍義「ツ！！？」

龍義は激痛を感じ、龍義のフラッグは後ろに下がった。

龍義「ぐつ……！？ こんな時に……！」

気が付けば、青いイナクトは遙か向こうに飛んでいた。

龍義「クツ、病院に行く暇が無くなつたから騙し騙しにしていたが……限界か……！」

龍義は右腕を押さえながらそう言った。

ピピッ！

龍義「！」

『アザディスタン軍ゼイール基地よりMSが移動を開始。目的地は王宮の模様。全機、制圧に向かって下さい。』

龍義「クーデターか……クツ、仕方ない、右肩の装甲を手土産にするか。』

龍義のフラッグはソニックブレイドをしまい、捨てたリニアライフルと斬り落とした青いイナクトの右肩の装甲を回収し、クーデターの鎮圧に向かった。

## 第9話 聖者の帰還（前書き）

受信アンテナを破壊した犯人を取り逃がした龍義はその犯人の機体の破片を調べさせていた。

ユニアオン軍簡易基地

龍義「どうですか？」

龍義はビリーに青いイナクトの右肩の装甲を調べさせてもらっていた。

ビリー「間違いないね、これはPMCのイナクトだよ。ほら、これを見て、じらさん。」

龍義「塗装用ナノマシンの塗装パターン…」

ビリー「そう、このパターンはPMC特有の塗装パターンだよ。今PMCの方にも連絡を入れてあるよ。」

龍義「そうですか。」

ビリー「後は、実際に現地に行つても少し情報を集めてみるよ。」

グラハム「私も行こう。」

龍義「中尉。」

グラハム「無論、龍義にも着いてきて貰うだ。」

龍義「…了解しました。」

龍義達は青いイナクトがミサイル攻撃をした場所にいた。

ビリー「やっぱり此処には捨てられたミサイルポッドとミサイルの火薬の残留反応しかないねえ。」

龍義「そうですか…」

グラハム「PMCトラスト側の見解は？」

ビリー「やっぱりモラリアの紛争時に紛失したも…」

グラハム「ん。」

グラハムはビリーを制止した。

ビリー「何だい？」

龍義「ツ…」

グラハム「立ち聞きは良くないな。」

「！」

グラハム「出て来たまえ！」

グラハムの間に岩陰から両手を上げながら一人の少年が姿を現した。

ビリー「地元の子かな？」

グラハム「どうかな。」

龍義「…」

「あの僕…この辺りで戦闘があつたって聞いて、それで…」

ビリー「成る程」。そういう事に興味を抱く年頃であるのは分からなくはないけど、この辺りはまだ危険だよ。早く立ち去つた方がいい。」

龍義「（何なんだ…？）あの少年には妙な違和感を感じる…（）」

「はい。そうします。失礼します」

少年は一礼し、立ち去つとした。

グラハム「少年！」

「！」

グラハム「君はこの国の内紛をどう思つ？」

「えつ……？」

ビリー「グラハム？」

グラハム「この国の内紛をどう思つかな？」

「ぼ、僕は……」

グラハム「客観的には考えられんか。なら、君はどちらを支持する？」

龍義「（中尉：貴方は一体何を……？）」

「支持はしません……。どちらにも正義はあると思つかり。」

龍義「（正義、か……）」

「でも、この戦いで人は死んでいきます。沢山……死んでいきます……」

グラハム「同感だな。」

「軍人の貴方が言つんですか？」

グラハム「この国に来た私達はお邪魔かな？」

「だつて、軍人が沢山来たら被害が増えるし……」

グラハム「君だつて、戦つてはいる。」

龍義「ツ！」

「えつ……？」

グラハム「後ろに隠しているのは何かな？」

「……！」

少年の後ろに回してある手には、拳銃が握られていた。

グラハム「怖い顔だ。」

「……」

グラハム「……」

龍義「……」

龍義「……」

龍義は密かに拳銃を取り出そうとした。

グラハム「フツ。龍義、一昨日ここから受信アンテナを攻撃した機体はA E Uの最新鋭機イナクトだつたな。」

龍義「はつ？ 何を突然…？」

グラハム「しかもその機体はモラリアのPMCから奪われたものらしい。撤収するぞ。」

龍義「（中尉…まさか…）あ…はい。」

グラハム達は撤収した。

ビリー「グラハム、何故あんな事を？」

グラハム「さあ、何故かな。口が滑つたとしか言い様がない。」

龍義「…貴方は絶対に何かを期待してますね。」

グラハム「フツ、それはどうかな？」

龍義「（なんというドヤ顔。）」

## ユニオン軍簡易基地

龍義「…………」

鐘時「よお WWWWW」

龍義「偵察終わりか。」

鐘時「…あ？ お前…背伸びた？」

龍義「ああ。何故かは知らんが、この歳で6センチも伸びたよ。」

鐘時「おいおい、それじゃ、交換しねえとダメじゃねえかよ。」

龍義「しかも、無茶な操縦が祟つてこう見えてもボロボロときた。」

鐘時「マジか。」

龍義「マジだ。」

鐘時「…ま、親父達に連絡を入れて新しい人工骨と人工皮膚を作つてもらうよ。」

龍義「ああ、ありがとう。」

鐘時「いいつてよ。俺達友人だろ?」

龍義「…フツ、ああ。」

鐘時「んじゃ、俺は寝る。お前も用ばつか見てねえで、さつさと寝とけ。」

龍義「分かった。そうしておくよ。」

龍義と鐘時はそれぞれの自室に戻つた。

アザデイスタン王宮前

ガンダム調査隊はフラッグに乗り、待機していた。

ハワード「CIBが王宮に向かっているって本当ですか？ しかも人質を連れて。」

ダリル「もしそうなつたら絶好のチャンスですよ、中尉！」

グラハム「フツ…刮皿させてもらおう。ガンダム。」

池田『こちら、アザデイスタン王宮前です。マスード・ラフマディー氏が保護され、王宮に向かっているという噂を聞きつけた市民達が続々とこの場所に集まっています。あー、未確認情報ですが、ラフマディー氏を保護したのはC.B.だという情報も入ってきました。果たしてここにガンダムが現れるのでしょうか。ともかく、改革派の象徴であるマリナ・イスマイール皇后と保守派の宗教的指導者であるカタフ氏の会談が実現すればアザデイスタンが内紛終結に向け、動き出す事は間違いないと思われます。』

ミゴ「…………」  
「C.B.が？ 一体何を企んでい……」  
ミゴ「黙つてて。」  
「…………グスツ」

龍義「（あの青いイナクトを退けたのか、それとも殺ったのか。俺は後者の方を望むが、残念だがそう簡単に殺られる様なヘマはしないと思うな……。それにしても……）」

ペピッ

「出でけ～！」  
「ちくしょ～！」

龍義「此処まで嫌われると寧ろ精々するな。」

ペピッ！

龍義「！」

ハワード「中尉！」

グラハム「分かっている。」

龍義「来たのか……！」

池田「ガ……ガンダムです！ ガンダムが上空から降下してきました！」

「マジかよ……」

ミコ「あ……」

池田「今、ガンダムがゆっくりと王宮前に着地しました！」

龍義「ハッ！」

龍義はエクシアを見て、何かに気付いた。

グラハム「武装を解いているだと……！？」

そう、エクシアは全ての武装を外しているのだ。

龍義「（これではまるで……）」

ババババババッ……

龍義「！」

「約束の地から出でていけ！」

池田「銃声です！ 数名の市民がガンダムに向け銃撃をしています！」

「そんなへなちょ！」がガンダムに通用すると思つて……いるのか？」「ミコ「……あ……」

池田「ガ… ガンダムが動き出しました！ ゆっくり王宮に向けて歩を進めていきます！」

ゆっくりと歩き出したエクシアに王宮前のアンフが滑空砲を向けた。

『保護した人質を解放せよ！ 繰り返す、保護した人質を解放せよ！』

ダリル「中尉！」

グラハム「黙つていなー！」

忠告を無視し、進んでいくエクシア。

王宮前にいた4機のアンフが一斉に滑空砲を向け、そして

ドンッ！ ドンッ！ ドンッ！ ドンッ！

4機のアンフはエクシアを一斉攻撃した。

だが、エクシアはGNシールドを装備していない為、両腕で攻撃を受け止めた。

龍義「ツー！」

グラハム「あつー！」

それでも、エクシアはほぼ無傷だった。

そして、エクシアは再び歩き出し、4機のアンフは銃を降ろし、エクシアの前にいたアンフはエクシアに道を開けた。

「…………」

人々は息を飲み、エクシアを見つめた。

そして、エクシアは王宮前で膝を付き、「クピットからマスードを

降ろし、マスードは王宮に入った。

池田「マスード・ラフマティー氏です！　CBがラフマティー氏を保護、王宮へと移送しました！」

そして、エクシアは飛び立とつとした。

ハワード「中尉！　追い掛けましょう！」

ダリル「今ならガンダムを……」

龍義「ツ！　止めろ……」

ハワード「えつ？」

龍義「今この状況が分からぬのか？！」

グラハム「そうだ、今そんな事をしてみる……我々は世界の鼻摘み者だ……！」

龍義「この危険な賭けは最初から自分達の敗北が決まつた様なものだ……！」

グラハム「……撤収するぞ。」

龍義「了解。」

二人「……了解。」

ガンダム調査隊は飛び去るエクシアを尻目に撤収した。

輸送機

龍義「……」

龍義はエクシアの事を思い出した。

龍義「（あれはまるで…殉教者、聖者の様だったな…。そして、マリナ・イスマイールとマスード・ラフマディーが共に手を取り合い、歩み寄る。少しづつでも争いを止める為に…）」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4515x/>

---

機動戦士ガンダム00 DESTINY外伝 『義翼の鳥』

2012年1月10日22時03分発行